

歸り又定保に侍す、後法嗣となりて長榮に住すること二十四年、殿堂を一新して國君の賞賜を受く、命を承けて大光院に住すること十一年、復た命を奉じて萬松寺に移り、住すること六年、齡七十三にして退隱して長榮寺定保の舊棲明星庵に住し、閉關兀坐、餘齡を養ふこと二年、文化八年十二月六日を以て安然坐化す、世壽七十五、全身を長榮寺先師定保の墳側に葬る。(龜山志)

三三 純

成

純成字は興雲、尾張日置村の人なり、父母嘗て關通和尚に歸し念佛す、純成出家の志あるも父母許さず、十二歳の時私に通れて關通に侍す、父母其志の奪ふべからざるを知り、遂に許す、因りて關通に就きて得度す、歳十五、増上寺に投じ宗脈を相承し、郷に歸りて圓輪寺五世となる、梵行清白、六時精勤、日課念佛六萬聲す、二十歳病に罹り、久しくして癒えず、寶曆七年正月三日寂す、壽二十三。(續日本高僧傳、名古屋寺院志)

三四 靈

瑞

靈瑞、龍道人と號す、曹洞宗の僧にして、萬松寺第二十三世なり、俗姓は田中、尾張春日井郡上原村の人なり、其先は清和帝の皇子貞純親王より出づ、祖政實刑部八と稱す、其子平兵衛

實次、寛文三年を以て遠江井伊谷より徙り、世々邑の豪たり、父平八郎重胤、江崎氏を娶り、元文五年四月八日を以て靈瑞を生む、初め江崎氏娘めるに方り、毎夜驚きて叫號す、重胤怪みて之を問へば、龍を夢みるといふ、喜で曰く必奇兒を生まん、己にして佛生日を以て生る、實次益々之を異とし、因て名けて龍之進といふ、靈瑞長するに及びて亦數々龍を夢みる、仍りて自ら龍道人と號す。

靈瑞、幼にして岐嶽、吠畝の間に長するを欲せず、歳十一、同郡志賀靈源寺に投じ、物道和尚に従ひて剃髮す、歳十四、江戸に游學し、泉岳寺に在りて日夜讀誦し、手卷を釋かず、内外二典より、諸子百家に至る迄、涉獵せざるはなし、傍ら思を文詞に馳せ、服部南郭に従遊す、歳十九、推され主盟となる、是に於て雲衲を指揮し、寬猛兼ね至る、明和七年夏、宇都宮成高寺、信濃大會を設く、淨侶集る者三百五十人、靈瑞を延きて以て第一座たらしめんとし、躬自ら來りて之を奨勸す、靈瑞素より隱遁して、其身を終へむとし、外飾を假りて世に高ぶることを欲せず、之を聞きて屑とせずして曰く、衣は身の文なり、身將さに隠れんとす、安んぞ文を用ふることを爲むと、固く之を辭す、信濃聽かず、還りて復來ること、凡七反、靈瑞其老の爲に強ひて忍びて之に従ひ、竟に其法を嗣ぐ、明年三月、京に入る、詔して黄衣を着することを許さる、既にして物道其寺を譲らんとす、靈瑞肯かず、因て衣を拂ひて、歎じて曰く、諸佛出世の本懐、儒教仁義の正意、豈文字言句の間に在らんや、夫れ學常師なし、醫道紅師と雖も、皆以て吾が道

資と爲すべし、何ぞ止だ知識のみならん、何ぞ止だ經卷のみならんと、是に於て海内を周流すること十有餘年に及ぶ。

靈瑞、京に遊び東福寺山中に寓し、法を五畿の間に説く、是時に方り信潤年益々老ゆ、潤は本薩摩の人なり、歸りて將さに展墓せんとし、靈瑞を從へて行く、薩人故其名を聞く、貴賤となく咸來りて益を請ふ、島原侯亦靈瑞の至るを聞き、城中に延いて厚く之を禮す、爲めに留まること數日、遂に長崎に遊びて歸る。

安永八年、尾張平田寺主寂す、遺書して寺を靈瑞に屬す、有司之を申し撤して靈瑞を徵す、仍りて已むことを得ず、來りて之に住す、是より先、寺水災に罹り、齋宇壞敗して四壁完からず、靈瑞以て患とせず、之に居て晏如たり、天明年間、諸寺に助化す、時に凶歲、荐りに臻り、穀價頗る貴し、餓卒途に相望む、靈瑞囊を傾けて米を買ひ、以て村人に施す、村人頼りて全きを得、官銀を賜ひて之を賣す、寛政元年、春法華經を泰増寺に講す、僧侶三百五十、聽者都を傾く、二年夏、三河香積寺に助化せる時、一夜雨る、山靈來りて法を問ふ、翌日施餓鬼會を行ひて授くるに法系を以てす、三年夏、平田寺修理功畢る、乃ち大會を設く、僧四百五十、尼七百八十五、居士高橋圓載<sup>美濃神戶人</sup>、米五百依を喜捨して、以て其費を助く、其他の財施勝けて計ふべからず、是を以て衆僧動息し、夏を過ぎて安穩なることを得、官復帛を賜ひて之を賞す、四年、府下大光院主闕く、靈瑞選に中り、超遷して之を領す、五年、萬松寺主闕く、當さに班を以て入りて之を

統ぶべし、是より先、萬松寺、行乞と境を踰えて法を説くことを禁ず、是を以て靈瑞敢て命を奉ぜず、曰く、萬松寺食祿ありと雖も、經費亦之に稱ふ、行乞せざれば、以て從者に給するに足らず、且四方豫め來りて助化を請ふ者皆既に之を諾せり、今にして之に違はゞ皆以て怨みんと、官悉く之を容れ而して後始めて命を聽く、萬松寺一月三次市街に行乞し、寺主境を踰えて法を説くこと靈瑞より始まる。

寛政十二年、春、織田信秀二百五十回忌に當り、授戒會を設く、道俗戒を受くる者一千三百人、文化元年、夏、長門萩享徳寺に助化す、疾暴かに作り、六月廿二日端坐して寂す、侍者骨を奉じて歸り、安榮、平田、享徳の三寺に分骨して葬る、世壽六十五、法臘五十五、初め江戸に在る時、擊節録を授す、平田に住するに及びて、又、宏智頌古録を授す、著す所の語録三卷と共に世に行はる。

靈瑞、平田寺に在るや、遊養自晦して、而かも名聲愈々彰はる、掃部頭勝長、之を聞きて一再之に造る、府下に住するに及びて、恩遇愈々渥し、其他士大夫、景仰せざる者なく、從遊雲の如く、推して一代の碩師となす、其助化せる所二十八寺、授戒する事三十三度、道俗化を被ふる者凡三萬人、法門の盛なる、近世未だ曾て有らざる所なり。

靈瑞黃を賜ふと雖も、敢て着せず、袈裟は必布を用ふ、曰く、夙志に酬ゆるなりと、其東福寺に寓せしより、寢に即くに敢て臥さず、唯安坐して睡るのみ、人其故を問へば、曰く、吾適々脚

の冷ゆるを憂ふるのみと、其儉素にして自ら伐らざること此の如し。  
靈瑞座に上り法を説く毎に、是非を分折し、言極めて高邁なり、聽く者皆以爲らく其人必  
豪爽ならんと、之に接するに及び、軟柔温和、絶えて驕色なし、是に由りて世人滋々、其徳を重  
ぜりといふ。(龜山志)

三五 境

宗

境宗、名は不奪、臨濟宗の僧にして、總見寺第十世なり、俗姓は渡邊、濃の錦織に生る、幼にし  
て俊逸、一を擧げて三を明にす、總見寺祥鳳に投じて祝髮受具し、明和五年祥鳳に嗣法し、妙  
心に轉版す、初め美濃西明寺に住し、祥鳳の寂するに及びて、總見の席を繼ぐ、天明元年信長  
二百年の遠忌に當り、新に書院を建立す、五年勅を奉じて妙心に住し、紫宸に謁して景陽に  
歸る、寛政二年十月二十七日寂す、世壽五十一、總見寺中に葬り、塔して妙應といふ。(景陽續列  
祖傳)

三六 珍

牛

珍牛、字は瑞岡、曹洞宗の僧にして、萬松寺第二十七世なり、寛保二年肥前天草に生る、俗姓  
は佐藤、父を茂兵衛といふ、家を長子周藏に譲りて後、出家して、聞喜寮善上座と號せり、珍牛  
幼にして島の東向寺に入り、驅鳥沙彌となり、靈泉惠照の教を受く、服勤年を経、十二世超宗  
越驛の時、典座の職を執る、超宗性極めて短氣なり、怒れば必ず器物を擲つ、一日典座寮に入  
りて觀るに、種々の陶器山積す、怪みて之を問ふ、珍牛平然として答へて曰く、和尚平生能く  
器物を放擲し、稍等甚だ之に苦む、依りて聊豫備をなすと、超宗苦笑して去る、之より其辭爲  
めに止みたりといふ。

既にして珍牛發奮遊方して、處々の知識に參見す、偶々長府功山寺に到り、海外亮天に謁  
す、意氣相投じ、一見夙識の如し、侍奉懈らず、遂に衣法を相續し、華叟派下第二十七傳の祖師  
となる、亮天は機鋒高邁の大宗師なり、後に松本侯の歸依を受け、信州全久院に住す、珍牛、寛  
政四年の冬、東向寺十三世の席を董す、之を住山の初とす、時に年五十一なり、住寺僅かに四  
年にして、寛政七年の秋、席を漢三道一に譲りて、松本全久院に轉住す、これ亮天の後席を董  
したるものにして、東向寺よりするは、蓋し逆轉なり、人傳へて其師に孝なるを讚歎す、享和  
元年秋、美濃龍泰寺に晋住し、三十二世の席を繼ぎて、方丈に南面す、天下の龍象、颯沓してこ  
ゝに集り、法席大に振ふ、時に玄透、即中劫後の永平寺を重興し、在山八年、享和二年將に高祖  
道元の五百五十回大遠忌を齎まん、乃ち珍牛に懇請して曰く、吾以天童之清規、勃興復  
古爲念、故萬里求知、已牛老當代、人師、巨海舟筏也、豈非西家、人不知東家、丘、磨と珍牛依りて龍  
泰を出づ、當時宗門の子孫、集る者雲の如く、其數五萬と稱す、而して大家名匠、亦蘭菊秀を競

ふ、中に就きて珍牛最も登龍門と稱せられ、問法參禪する者斷えず、遂に玄透の依囑により、泉聲潺湲たる玲瓏巖下に雲衲を提擲し、留錫すること三期にして、卓然として退藏す。

珍牛已に龍泰を去り永平を出で、天下一介の雲衲として身を江戸繁華の巷に投じ、洒然脱然適然として紅塵淡々の中に優遊するもの十餘年、此間の行動最も奇拔を極め、或は芝居の幕引を爲したりといひ、或は蝦夷松前に渡りて魚舖に庖丁を振ひたりといひ、頗る逸話を傳ふ時に駒込吉祥寺の僧堂再興せられ、珍牛を請して師家と爲す、是を以て珍牛の名勃然として天下に鳴り、諸侯の參叩する者亦踵を接ぐ、而して高標彌高く、仰いで請せんとする者亦鮮からざれども、皆斥けて應ぜず。

文化十四年尾張萬松寺主闕く、尾張侯齊朝懇請して萬松寺に住せしむ、時に豪潮侯の歸依を受け尊信最も厚し、豪潮固より珍牛と相好し、依りて亦慈愍して止まず、珍牛遂に侯の志厚きと、豪潮が友情に感激して、錫を名古屋城下に留め、八月十九日を以て入院の式を行ふ、其儀の盛なる前古未だ聞かざる所にして、彦根清涼寺の寂室堅光書を贈りて之を賀し、侯亦上啓文を賜ふ、珍牛の萬松寺に住するや、魚板頓に響を改め、門風大に振ふ、侯院中庫裡等を再建せしめ、壯麗人の耳目を新にす、居ること四年、衰年應接に倦み、文政三年席を黃泉無著に譲りて慶雲軒に退隱す、軒は布ヶ池に在りて、本尾張侯宗春の隱邸なり、後に尾張侯の祈願所となし、護國院清久寺と改め、珍牛を以て開山とす、珍牛此處に在りて風月を友と

し、餘生を送ること三年、文政五年四月九日一偈を留め、泊然として化す、偈に曰く、

八十年前一小童、是誰能作八旬翁、無初中後初中後、物外乾坤示異同、世壽八十一、闡維して光正院千種町に塔す、黃泉其秉炬師たり、法嗣默室良要、亦天草の人なり、其席を繼ぎて第二世たり、天保四年寂す、圓爾大方其後を繼ぎて第三世たり、亦珍牛が法嗣なり、珍牛が得法の弟子に十哲ありと雖も、今其名を審にせず、珍牛詩書畫を善くし、就中其畫は風格超逸、其筆の靈妙、人の推稱して措かざる所なり、弟子默室或書に、珍牛尾張の僧畫に巧なりとあるを見て、喟然として嘆じて曰く、嗚呼我が師徒に畫筆を弄せられしが爲に、三界導師の尊を以て却て俗人輩をして珍牛と其名を呼ばしむ、今より以後、我が法門の子弟、斷じて畫を學ぶこと勿れといへりとぞ。(護法第三十二年九號、青憲紀聞、名古屋社寺記録集)

三七 豪潮



釋氏 豪潮

豪潮名は寛海、初の字は快潮、洞龍、又无所得道人と號し、別に八萬四千煩惱主人といふ、天台宗の僧にして、柳原長榮寺の開山なり、寛延二年六月十八日生る、肥後玉名郡山下村眞宗安養寺の塔頭、專光寺二世貫通の第二子なり、三歳の時日に佛像を刻するを以て嬉戯とす、父會て天台を學ぶの志あり、而して果さず、仍りて豪潮を

肥後守

釋氏 豪潮

五八二

して同郡繁根木山壽福寺に入り豪旭に従はしむ時に七歳なり旭一見して歎じて曰く此兒異相あり他日必ず高德たらんと遂に旭に依りて得度す經を學ぶに口に應じて暗誦し人皆神童と呼ぶ既にして師の誨を須たずして内外の典皆自ら通曉す歳十六比叡山に登り豪恕大僧正に従ひ明和五年九月二十日叡岳灌室に入りて三密瑜伽の大法を傳受す安永五年秋豪旭の病むに遭ひて國に歸る未だ幾ならずして旭師寂す信徒豪潮に壽福寺に住せんことを請ふ豪潮曰く汝等余の爲す所に於て一も違ふ事なくんば之を諾せんと衆喜びて違背することなきを誓ふ是に於て豪潮師跡を繼ぎ翌日倉廩を開きて米八十依を出し之を貧民に施與す信徒之を視て大に驚き走せて之を留む豪潮曰く凡そ僧伽の貯蓄あるは佛意に背けり今日の食を蓄ふるも明日に及ばずと衆之に服す又院内の酒器を集め臼に入れて之を粉碎す豪潮持律堅固行住坐臥毫も佛制に悖らず夜に入るも枕に就かず唯だ床に憑りて端坐し夏夜は蚊蟻を用ひず飛蚊の血を吮ふに任す

豪潮幼より準提觀音を信じ其秘法を修して諸人の病苦を救ひ鬼靈の祟りを鎮む而して八萬四千の願を發して衆生を化益す四國九州の諸侯歸依渴仰し道俗皆來りて崇敬す豪潮諸侯の請に應じて所々に法輪を轉じ専ら化他を事とす至る所貴賤男女争ひて迎へ其法益に潤ふ者萬餘人に及ぶ乃ち肥筑豊の諸州に準提觀音の靈場を創建す寛政八年京師に雲遊し御幸町の書肆橋屋に寓して諸人を化度す十一年再び京に入る時に光格天皇

の寵妃病あり豪潮加持して忽ち靈驗あり依りて準提觀音像及黄金十枚を賞賜し且つ欲する所あらば之を奏せよと宣ふ豪潮白して曰く三衣體を蔽ひ一鉢腹に充つ賜ふ所の黄金は皆悉く之を貧民に施すべし何ぞ復求むる所あらんやと天皇深く其清徳を賞したまふ聖護院宮益仁法親王の病を祈るに亦驗あり親王時及物を賜ふ是に於て東の森積善院に居を給ひ隔日親王の爲に圓頓章を講ず親王感嘆して措かず一日之を寂間に達す乃ち内勅あり特に寛海大師の號を賜ふ又皇子降誕の祈をなすべきの内勅あり豪潮命を奉じて修法し翌年皇子降誕したまふ天皇益々尊信を加へたまひ遂に受戒あらせたまふの内勅あり聖護院宮天皇に代り靈感院尼宮中宮に代り積善院に於て之を行ふ宮女皆此處に來りて受戒す寛文十二年五月肥後に還る是より國主復九州の外に出づるを禁ぜり

尾張侯齊朝豪潮の名を聞き之を招請せんとす偶々肥後侯の禁令あるを聞き一橋公に託して旨を肥後侯に致さしむ侯依りて豪潮に命じて尾張に至らしむ文化十四年春豪潮名古屋に來る錫を萬松寺に留め即日登城して齊朝の病を加持するに法驗神の如く病立どころに愈ゆ留ること三年其間護國利民の大法を嚴修し又準提法を以て弘く遠近の諸人を救ふ詣者四方より雲屯霧集す初め豪潮の來る三年の期を約す是に於て期滿ちて將さに歸らんとするや齊朝固く之を留め請疏を送りて知多郡岩屋寺に住せしむ豪潮辭すること能はずして之に従ふ文政六年四月城北柳原に祈願所を創建し豪潮をして之に居

釋氏 豪潮

五八三

り、岩屋寺の住職を兼ねしむ。天保六年三月、愛知郡諸輪村洞松山長榮寺の廢せるを興し、柳原に移して之に住せしむ。同年閏七月三日寂す。世壽八十七。杉村時雨庵に葬る。其人と爲り温にして威あり、貴賤を以て禮を殊にせず。衣服居處、矜飾を事とせず。一破笠五十餘年、常に節約を旨として、机上の草稿専ら故紙を用ふ。性泉石を愛して、而も物を玩ばず。博學宏量、詩書畫を巧にす。曾て長崎に在るの日清人程赤城に會して、天台山圖を模寫せんことを屬す。赤城仍りて實寫して之を贈る。今叡山淨土院に藏する所のもの即ち是なり。又江塚圃の贈る所の天台山圖横卷は後知多郡半田中野氏に傳ふ。豪潮全國到る處に八萬四千の寶篋印塔を建つ。豊前彦山中段の一基、江戸淺草寺及名古屋萬松寺今鶴見總持寺に移すに在るもの最大なり。其他遺教經を血書し、又能く施米施藥を行ふ。其諸州を歴遊して化度せるを記せるもの加持靈驗記あり。(寛海大師行業略記、感興漫筆)

三八 辨 靈

辨靈、金蓮社申譽と稱す。號は瑞華、淨土宗の僧にして、建中寺第廿四世なり。本州熱田に生る。幼にして穎敏、一日尼某携へて相應寺に到る。途上市廛の招牌の文字、一々讀み去る。人皆之を異とす。到譽、試みに經を授く。一習便ち誦す。到譽掌を撫して嘆じて曰く、今幸に此の寧馨兒を得たりと。乃ち入室を許す。長ずるに及び、偽異靈慧、江戸に游學して、増上寺に精す。宗

門の章疏一として研究せざるはなし。又目黒長泉律院徳門に隨ひて、華嚴天台の幽旨を聽く。歳二十四、登壇受具し。後京師に適き、天章を拜受し。留まる事三四年にして、郷に歸る。居ること幾もなく、官選に依りて津島西方寺に住し。寛政十年命に依りて高岳院に移る。文化元年再び命に依り相應寺に轉じ、八年三度命を受けて建中寺に住す。是に於て聲名愈々盛なり。

辨靈、性豪邁、聲利を好まず。暇あれば室を閉ちて書を読み、未だ嘗て一日も廢せず。又詩を好み、古書畫を愛するの癖あり。梅山、春輝、東溪、東亭の徒、深く辨靈の徳を慕ひ、時に來りて法を聽き、傍ら書畫譚に及ぶ。嘗て自ら謂ふ、吾書畫を愛する、唯古人の高情逸韻を觀、以て我法を養ふのみ。何ぞ其物に執着せんやと。一僧あり、靈の禪室を訪ふ。侍者茶を點す。靈道樂の製する所たり。床上には宗旦の書を挂く。僧賞嘆して已まず。終に之を售らんことを乞ふ。辨靈笑て允さず。曰く、我は賈を待つ者に非ず。假令子之を買はんと欲するも、何ぞ及ばんと。他日侍者に託して曰く、吾儻し死せば此を彼に與へよと。歿後遂に之を貽る。其澹白なる事此の如し。

文政四年、退隱を乞ふて聽されず。再び乞ひて遂に清淨寺を賜ひて、隱棲の地となし。又齋供及黄金若干を給ふ。是に於て移り住し。常念佛を開始し。丈室、書齋、庫院等を營み、幾もなくして舊觀に復す。一夜偷兒あり、夜其寢室を窺ふ。時正に仲夏なり。靈蚊榻裏に臥す。偷兒劍を

按し懶を棄け責めて曰く、財何く、に在りやと、靈自若として答へて曰く、此れ隱室にして無人の地なり、焉くんぞ財を藏せむ、兒去れ、嗟乎何ぞ電光朝露の身を以て、阿僧祇劫長時の苦種を植うるやと、語間時移り、夜已に鷓鴣に達す、偷兒駭き去るといふ、他日人に語りて曰く、昔師子尊者、聖果を得るの後、外道に害せらる、宿業の招く所、又何ぞ免れむ、我れ死を怖れざるの意此に在りと。

文政八年春、病に臥す事數日、自ら終焉の近きを知り、弟子舍城に遺囑して曰く、夫れ徳興山は邦君香火の地にして、淨宗一方の名藍なり、而して從來藏室なし、豈精舍の闕典に非ずや、我れ多年創建の志ありと雖も、資財匱ならずして、此に至れり、頃年財貨漸く足る、汝等官に聞して之を辨じ、我をして國家の大恩に報ずるを得せしめよ、然らば死して憾みなけむと、其他懇に後事を託し、竟に看護者をして、香を焚き、日課の百萬遍を修せしめ、端坐念佛して寂す、世壽六十七、實に文政八年正月二十八日なり、建中寺歴代の次に増す。(名古屋社寺記録集)

三九 日 潤

日潤、一雨院と號す、日蓮宗の僧なり、寶曆九年名古屋大和町今西區茶屋町二丁目に生る、幼にして族人中島氏に育はる、年甫めて九、自ら請ひて城南妙住寺に燿髮し、法華を受持す、又儒典を好

みて、礪谷滄洲に師事し、嘗て詩百韻を賦す、滄洲目するに神童を以てす、少壯錫を四方に挂け、諸老宿に參謁し、大に玄樞を得て歸る、後城西日比津村定徳寺に住し、同寺二十五世たり、既にして切りに隱遁の志を發し、遂に寺を法嗣に譲り、廬を寺外田畝の間に結びて、獨居して自ら炊ぐ、日潤嘗て歌を日野資枝卿に學ぶ、是に於て歌を詠じて以て娛となす、性溫粹、物と忤はず、常に元政と日相との人となり、を慕ひ、學行共に私淑す、遠近風を望みて來り訪ふ者、繩々絶えず、日潤人に隨ひて法を説き、善く之を導く、一士人ありて佛理を問ふ、日潤曰く、佛理は士の急務に非ず、故に之を究むるも益なし、専ら弓馬刀鎗の技を習ふに如かずと、一向宗を奉ずる者あり、日潤の高徳を慕ひて改宗せんことを請ふ、日潤默すること良久、うして曰く、我宗は一字を多くす、改めざるに如かずと、嘗て夜盜ありて、密かに其廬に入る、日潤見て之を呼びて曰く、來れ吾將さに汝に訓へんと、盜大に畏れて逃れ去る、寛政三年招請辭することを得ずして、往きて京東岡崎滿願寺に住す、幾もなくして辭して日比津の舊廬に歸り、意を山水に縱にし、親友義故と吟咏して以て情を暢ぶるもの數十年に及ぶ、文政六年本用院日就といふ者、來りて名古屋の諸寺に説法し、頗る異端を説きて、道俗を惑はす、日潤法の爲に默することを得ず、其祖意に違ふを責む、而して其争決せず、遂に本山の裁する所となりて日就を屈す、年七十餘に至り官命に依りて辭することを得ず、身延山久遠寺第六十世の貫主となる、既にして辭し去りて尾張に歸る、其去るに臨み、鄉民別を惜み、道路に

涕泣して之を送るといふ、日潤總見寺卓洲と相善し、常に互に相來往す、日潤總見寺に至り、夜深うして歸る、卓洲之を門に送り、室に還りて寝ねず、日潤の日比津に歸るの頃を計り、侍者に告げて曰く、老僧應さに庵室に入りて寝ねん、我も亦臥すべしと、始めて寢に就く、人其交情を美とす、天保九年閏四月七日寂す、壽八十、定徳寺に葬る。(日潤上人塔、尾張名家誌二編、名古屋人物史料、曾憲紀聞、設古)

四〇 卓洲



卓洲名は胡僊臨濟宗の僧にして總見寺第十一世なり、俗姓は鈴木、海東郡津島の人なり、夙に出家の志あり、年十五總見寺祥鳳に就きて剃染す、時に良哉塔頭陽巖院に在り、常に其提誨を受く、十九出遊して美濃谷口汾陽寺に掛塔し、快岩に事ふ、尋いで高野山に登り、京師に入り等持院靈源に見ゆ、翌年の春丹波添谷清泰寺及び但馬城崎極樂寺に於て再び良哉に謁す、秋名古屋に還り、白林寺月鑑に峨山慈棹の高風を聞きて東遊す、踏駿河を經、菩提樹院に大會あり、因りて達翁に謁し、遂に箱根を踰えて、武藏永田の寶林寺に投じて峨山に隨侍す、初め趙州無字の公案を得、日夜參究すれども茫とし

て入る所なし、乃ち峨山に請ひて九十日の暇を得、一庵中に兀坐して孜々として攻竅し、寢食を廢するに至る、一旦忽ち其蘊底を透見して峨山の許可を得、是より諸種の機關を透過し、潛行密修すること十四年、遂に其蘊奥を究め、一時の老宿と雖も敢て之と齒せず、推尊して師となす、寛政七年八月十一日妙心寺に轉版し、八年二月三十日選に中りて總見寺に住す、然れども寺務に係らず、唯道を以て己が任となす、是に於て府内の緇素、翕然化に嚮ひ、徳輝海内に輝く、從遊する者日に多きを加へ、法化甚だ盛なり、卓洲日夜誘掖し、恂々として倦まず、人を導くに常に多言を用ひず、一言以て之を服せしむ、人あり問ひて曰く、余色を好むの疾あり、如何して之を除かんと、對へて曰く、唯之を忍ぶのみ、聖聰院白世子屢々使を遣して参心要を問ひ、隻手の聲を聞き、以後深く造詣する所あり、桑名侯松平下總守、亦數々來りて参請す、文化十年春、三河荻之平三玄寺の請に應じて、始めて碧巖錄を提唱し、盛に峨山の宗風を振ふ、十月十三日繪旨を受けて妙心寺に出世し、紫衣を賜ふ、十二年美濃久々里東禪寺の請により、臨濟錄を提唱す、十三年七月五日藩主齊朝褒書及び白銀三枚を賜ふ、文政三年秋總見寺僧堂を改築す、翌年美濃普濟寺の請に應じて、關提記聞を講じ、五年琉璃光寺の請に應じて臨濟錄を提唱す、同年遠江東光寺の請に應じて、虛堂錄を提唱す、爾後美濃眞光寺、清泰寺、少林寺、永保寺、信濃長久寺、大雄寺、王川寺、駿河蓮光寺、相摸了義寺、三河天恩寺、甘泉寺等の請に應じて、碧巖錄、臨濟錄、并に棟安國語等を提唱す、十年閏六月八日、又藩主より褒書及



び紗綾二端を賜ふ。天保二年六月二日、開基織田信長二百五十年忌に當りて結制し、虛堂錄を講ず。衆凡そ五百餘人、別に假堂、三字を建て、之を容る。藩主齊澤、米百石金百兩を賜ふ。三年四月二十四日、退きて塔頭東林院に隱栖す。藩主又縮緬二端を賜ふ。十二月疾あり。四年八月二十八日寂す。世壽七十四。法臘六十。總見寺中に葬り、塔を建て、聖壽と號す。十月二十二日、大道圓靈禪師の勅諡號を賜ふ。(尾張景陽山總見寺十一世卓洲和尚傳、近世禮林僧寶傳、日本佛家人名辭書、尾張名家誌二編)

四一 靈 曜

靈曜、威廣院と號し、別に鐘山と號す。眞宗大谷派の僧にして、富永山養念寺第八世なり。寶曆十年十月四日、加賀大聖寺の願成寺に生る。幼にして聰敏強記、七歳にして能く三部經を誦す。十歳志願を懷抱し、越前金津の永臨寺香月院講師に從ひて宗乘を學ぶ。後遠近の名利を歷遊し、廣く内外の典籍を學び、紀伊根來山の學頭蓮華院貫主金毛法住に從ひて、俱舍論及び法華文句を聽き、又河内高貴寺貫主慈雲に就きて、梵書并に戒律を學ぶ。

寛政八年八月、名古屋養念寺義龍の義子となりて入院し、翌年七月住職となる。享和中一切經藏を建立し、文化二年に至りて藏經全部を備ふ。後更に堂宇門廡を再建す。文化二年五月、法主延いて擬講となす。是に於て始めて法華入疏を本山學寮に講じ、夏より秋に至る。後

文化五年復阿毘達磨俱舍論を講じ、夏より冬に至る。聽講者三百有餘。古今の紛論を解き、一類の金玉を吐く。之より佛典を各所に講じ、又自坊の境内に五戸の寮舎を建て、所化を教養す。文化六年寺格を院家に進めらる。靈曜學博く、加ふるに辯舌に長するを以て、其説教の席を開く。毎に聽衆堂に溢れ、境内の松樹に攀ちて聽く者あるに至る。別院輪番僧等、其盛名を嫉み、本山に讒するに靈曜の説く所本宗の旨に違ふを以てす。此故に文化九年五月、本山命するに三年間の蟄居を以てし、延いて師香月院も亦咎を受く。後寃晴れて閉居を解かる。靈曜隠藏の志を發し、文化七年より十年にして其志を全うす。後寺務を謝して、威廣院と稱し。文政五年十一月七日を以て寂す。壽六十三。寺中に塔す。安政元年本山嗣講を贈り、四年講師を贈り、明治二十五年本山酬德會法名記に其名を列す。(墓碑、名古屋寺社記録集)

四二 性 俊

性俊、字は實祐、臨濟宗の僧にして、名古屋本町の人なり。俗姓は伊藤氏。少にして八事山諦忍律師に投じ、剃髮受戒す。諦忍寂するに及び、出でて紫野蓮臺寺隆辨僧正に依り、四度の瑜迦及灌頂を受け、報恩院流の流を汲む。又河内延命寺眞常和尚に從ひて諸義軌を受け。後、天倪禪師に謁し、其寂するや、更に性堂和尚に請益する事七年。密かに心印を傳へらる。

性俊、多病、尾張に歸り禪を修する事十五年。文化七年、性堂東福寺に在りて臨濟錄を提唱

するや、性俊往きて之に謁し、衆と共に四教義及び護法資治論等を講ず、明年八月、蓮臺寺慧嶽阿闍梨、大通寺にて地藏院密儀を授くるに方り、性俊亦之を受く、九年三月、東福寺に歸り、金剛經、禪關策進等を講じ、十一月末日寂す、壽五十一、大通寺に葬る。(續日本高僧傳)

四三 黃泉



〔黃泉〕名は無著、雖小菴と號す、曹洞宗の僧にして、萬松寺第二十八世なり、愛知郡山崎村の人にして、俗姓は江崎氏、安永四年生る、父雪江、法を諦忍、頭極二師に聞き、其兒をして出家せしむ、八歳村の黃龍寺雄道に隨ひて、驅鳥となる、師父相謂へらく、此兒教ふべしと、道累りに白鳥、天徳に遷り、期年にして寂す、黃泉學を父に習ひ、蒲鞋

杖道を四方に問ふ、寛政十一年歳二十五にして、亮天に攝津法華寺に參し、狗子無佛性藤の話を見て、晨夕參叩す、天罵りて曰く、參禪は啞子の夢を得るが如きを要す、汝が性點慧參禪に勝へずと、黃泉忿然として、一夕雨に對して坐す、羅僧の遙に大に黃泉を喚ぶあり、黃泉一喙し、撲然として省するあり、去りて近江無名庵に千丈に隨ふ、適々新刻永平清規を閲して、祖訓に感じ、越前に赴きて、玄透に永平寺に參す、復た武藏に至り、靜閑院白淳に謁し、享和二

年高祖五百五十年に永平に詣す、衆の聚る者六萬五千餘、一時の名徳皆な來る、黃泉其巨擘に撰ばれ、香を懷いて參す、文化元年歳三十再び攝津に至り、藏經を五毛山社に讀む、夜は則ち社燈の下に立ちて之を閲す、人以て棲賢誤周に比す、閱藏五歳、法を白鳥覺道に得、二十年の修證、一布伽梨に換へ得たり、文化八年始めて邑の白毫寺に住す、上堂に云はく、應緣化物、方便喚爲智、主文を拈して曰はく、者個不會應緣、不會化物、恰好七尺依然、翹々具道、喚作什麼、百鳥不來春又過、綠陰雨霽送微涼と、時に白鳥善篤、萬慶、越前諸寺の請あるも之を辭せり、當時尾張の地未だ古規を行ふ者あらず、黃泉資りてこれを始む、永平行狀之圖を刻して之を弘布す、四方の士女結社して祖山に詣することを知るは、黃泉の化なり、尾張侯請して、大光院に住せしむ、依りて同寺二十三世の法席を嗣ぐ、時に珍牛、萬松寺に住す、黃泉力を戮せて、祖規を一國に興復す、永平寺牘を寄せてこれを喪す、文政三年歳四十六、又國侯の命に依りて、萬松寺に移り住す、僧堂衆寮、接賓諸廊廡を鼎新して、一に祖様に準ず、道風一時に靡然たり、住すること九年、文政十一年の夏、幕府の命に依りて、長崎崎臺寺に轉住す、長崎の俗、葬を送る者、連聲放歌す、黃泉之を憫みて、諸町に諭す、一年を出でずして、惡習止む、常に雲納と共に、妻を飯し、布を衣て、而して新に勅使門、僧堂、寶庫、通玄閣等を造る、黃泉博覽強記、書を善くし、類る文藻に富む、生涯讀書を廢せずして、毎に深夜に至る、禪餘正法、眼藏涉典、續貂、反爾錄、小清規、冥心經、忘算、雖小菴雜稿等の著あり、復た普門品圖を刻し、これを海外に施す、故に海外

の編纂、黄泉の名に、す來舶の畫家江塚圃、江芸閣等、深く黄泉を崇敬し、芸閣十六羅漢の畫像を寄贈す。天保九年十二月十七日寂す。世壽六十四。辭世に曰はく、

忘手舞、忘足踏、捧爐神、起復倒、

はなはちりもみぢは枯れてとしくれぬあはれ此身のかぎりなるらん

皓臺寺に塔し、墓を福壽院中區裏に建つ、(黄泉和尚小傳、名古屋寺院誌)

四四 行

阿

行阿、名は大基、字は如法、常連社立譽と號す。淨土宗の僧にして、建中寺第廿七世なり。俗姓吉村氏、筑前島原に生る。寛政八年歳十二にして、久留米心光寺運譽辨師に就きて落髮受戒す。十九歳傳通院に入り、學頭智門に學び、明年鸞洲に就く。二十五歳白蓮社徳本行者に隨ひ、十月京都に遊びて天台學を一如律師に受け、又法相を慈海阿闍梨に、華嚴を典壽律師に學び、宗學を嵯峨立導師に受く。三十歳徳本に隨ひて江戸に歸り、淨心院鸞洲の室に入る。文化十一年傳通院華王窟學頭となり、居ること殆んど三十年。華王を中興す。天保三年建中寺に住し、弘化三年五月退院して來迎庵に隱棲す。明治三年二月二十五日寂す。壽八十六。萬七十五。建中寺に葬る。著す所尾陽往生傳三卷あり。(名古屋寺院誌)

四五 無

底

無底、名は大龜、字は浦靈、黄檗宗の僧にして、天保十二年三月府下東輪寺に住し、同寺第二十四世たり。學徳高きを以て世に尊信せらる。其徳行藩主の聽に達し、褒賞せられし時、人に語りて曰く、貧道何等の殊行なし、唯僧侶の分を盡せるのみ、然るに賞を賜ふこと斯の如し、是れ世を擧りて破戒の僧のみなるに由ると、人愈々其志を高しとなす。在任六年、後仙臺大年寺に移り住し。安政二年三月十三日を以て寂す。(名古屋寺院誌、汲古草稿)

四六 惟

一

惟一、名は成允、曹洞宗の僧なり。俗姓は宮島氏、父を平兵衛といふ。美濃可兒郡音刈村に生る。幼にして尾張丹羽郡下野の安穩寺に入りて剃染す。後同寺に住すること年あり。會々川越侯、大和守、松平齊典の請に依りて武藏孝顯寺に遷り、同寺第十八世の席を董す。晚年尾張に歸り、鳴海如意寺に隱栖して同寺の法地開山となり。文久元年永平臥雲の懇請に依りて、西堂として越山に赴き、正法眼藏を講す。其冬寒氣の犯す所となり、病を獲て國に歸り、十一月朔日を以て寂す。世壽七十三。如意寺に葬る。惟一、正法眼藏に精通し、當時海内の第一人者を以て稱せらる。初め川越に在る時、屢々請に應じて江戸に出で、吉祥寺僧堂に眼藏を説く、

他師の講席には聽者百數十人に過ぎず、一たび惟一の堂に上るを聞けば、聽者常に五百に餘る、其名聲の盛なる以て窺ふべし、鳴海に退隱せる後、亦屢々福壽院西核の請に應じて、名古屋に來り同寺に在りて眼藏を講ず、隨從して名を成せる者に、鑑法名古屋萬松寺三十三世、蜜玄名古屋善馬寺二十七世、哲心鳴海瑞泉寺廿九世等あり、臥雲會て其畫像に贊して曰く、鳳肩龍骨、鼻孔累垂、如在眞相、非汝師誰と、又、西有穆山の贊に曰く、能達洞上旨、大煽承陽風、平常道惟一、盛化兩關東、允得如意術、高德聲蒼穹、終奉西堂命、夜坐對傘松、七十有三歲、入寂示圓機、春日百花艶、秋天翻紅楓、(名古屋人物史料)

四七三 井蓮純

三井蓮純は眞宗高田派の僧なり、寛政八年尾張熱田大瀬子町に生る、父を鈴木七左衛門愷長といひ、魚問屋を業とす、蓮純は其第二子なり、年十三、郡の高針蓮教寺に入りて僧となり、經史を秦滄浪の門に學び、傍ら書法を尾頭廣居に受く、年二十一、鳴海萬福寺に入り、更に佛典を海惠講師に、佛曆算術を普門律師に受く、文政二年同寺住職となりて、權律師に任じ、十年本堂を再建す、藩主白銀を與へて之を賞す、蓮純學内外に通ず、法務の傍ら門を開き、徒を聚めて書算經史を授く、其間殆んど六十年、業を受くる者數千の多きに至る、明治五年訓導に補し、十二年權中講義に陞る、而して本山學場助教となり、内陣本座の賞を受く、十四年二月二十四日寂す、壽八十六、寺内に葬り、謚して淨曉院釋德輝蓮純上人といふ、著す所須彌

略一覽あり、(名古屋人物史料、萬福寺過去帳)

四八 蘇山

蘇山、名は玄喬、臨濟宗の僧にして、徳源寺開山なり、俗姓高橋氏、肥後熊本の人なり、寛政十一年生る、六歳にして父を喪ひ、遂に出塵の志を發し、見性寺啓邦に従ひて、癩染す、賦性穎敏、儀容甚だ偉なり、十八歳豊後に遊び、月桂寺春澤に事へ、又阿波興源寺玉潤に謁す、暫くして母の疾を聞き、郷に歸りて侍養す、既にして思ふ所あり、懇に告げて母に別れ、尾張總見寺卓洲に事ふること三年、頗る悟る所あり、入りて所解を呈す、卓洲難詰數番、酬答略ぼ凝滯なし、卓洲又萬頃荒田誰爲主を問ふ、蘇山答て未だ卒らず、卓洲忽ち喝して去らしむ、蘇山堂に歸り、東疑西疑、殆んど寢食を廢す、適々村落に至り、農夫の田を耕すを見、熟視すること久しうして、忽然として省する所あり、歡喜に堪へず、走り歸りて所見を呈す、卓洲首肯す、此より更に毒棘を受くる者十有二年、終に濫奥を竭くす、卓洲寂後、備前國清寺に入り、月珊に従ふこと一夏、天保五年冬、熊本に歸りて見性寺に住す、國老長岡氏蘇山の徳を慕ひ、更に堂宇を造りて雲納を容る、嘉永四年夏、結制碧巖錄を提唱す、四方來りて講を聽く者五百餘人、是歲秋、勅を受けて妙心寺に住す、見性に在ること十八年、是に至りて葆岳をして後を承けしむ、是より先山城八幡圓福寺石應寂して、僧堂席を慮うす、雲納相謀り蘇山に請ひて、幡を移さし

む、安政六年、妙心寺開山五百年遠忌に當る、衆僧蘇山を迎へて山に就かしむ、臨濟録を提唱すること七日、雲納曆集一千餘人に至る、文久二年、圓福寺中興海門、并に海山、石應の年忌に値ひ、五祖録を提唱すること三旬、來り聚る者五百餘人に及ぶ、同年、尾張美濃の諸寺、尾張侯の命を以て、德源寺を以て、江湖道場となし、蘇山を請ひて開創の祖となす、蘇山之に移り道俗風靡して、幾も無くして、屹として大道場となる、慶應元年、其德雲上に聞え、特に勅して神機妙用禪師の號を賜ふ、二年、春、尾張侯亦褒賞を給ふ、同年、秋、再び妙心寺五百三十五世の席を董す、時に孝明天皇崩じ、將軍家茂亦薨す、蘇山、燒香、瀛經二場之に加はる、明治元年、冬、槐安國語を提唱し、僧侶を督勵し、第七日の夜間に至る、仍ほ衆徒を集め、紺鏡甚だ勤む、雜鳴に至りて歸りて方丈に入り、明旦、疾に罹り、居ること五日、中夜、病革む、自ら四句の願文を示し、且之を唱へ、曉に至りて端坐して化す、實に十二月十五日なり、世壽七十、法臘六十二、德源寺に葬る、蘇山性溫和なり、然れども來機に接するに至りては、輒ち呵風罵申、毫も假借する所なし、其、鋤下、惟庵、樵、羅山、鰲嶺、愚溪、伽山の諸老を出だす、(近世僧叢錄、名古屋人物史料)

## 四九 洞松實戒

洞松實戒、名は亮阿、剛愚と號す、天台宗の僧にして、長榮寺柳第二世なり、俗姓は有澤氏、維新の後、洞松と稱す、越中、礪波郡、佐野の人、寛政十二年正月元旦、旭日の昇ると共に生る、幼よ

り出家の志を懷き、遂に父母の許を得て、文化十四年十一月廿四日、比叡山に登り、西塔、金光院、亮照律師を拜して、薙髮し、苦學精修、同輩に超ゆ、爾來、出離の念切にして、志を捨身の修行に潜め、法華、金光明、仁王、菩薩戒經等を血書す、三十歳に至る迄、常住不臥、毎夜、釋迦堂の椽端に坐して、觀修すること三年、後、智積院の學寮に入り、俱舍性相の學を修め、金峯山に登り、専ら禪觀法に心を凝らし、又、紀伊天の川に往き、其勝地を愛して、掛錫すること數日、毎日、岩上に露坐して工夫を凝らす、後、金剛山に登り、斷食定坐すること六十餘日に及び、靈異を感應す、既にして尾張に往き、長榮寺、豪潮に謁して、師資の禮を執る、是より先、豪潮弟子に告て曰く、近日、應さに高僧の來寺あるべし、汝等、院内を清掃して、以て待てと、未だ數日ならざるに、一僧の來り訪ふものあり、身に氈衣を着し、宛も行脚僧の如し、弟子之を豪潮に報ず、豪潮欣然として出でて迎へ、之を室に請す、即ち實戒なり。

天保六年十月、終に豪潮の後を繼ぎて、長榮寺に住す、尾張侯大に其德に歸依し、常に城中に請じて加持せしめ、又密法を修せしむ、明治七年三月、大講義に補し、十二月、權中教正となる、十年、大坂四天王寺に遷り、十二月、權大教正に進む、十五年三月、疾に罹り、臨終の前日、諸弟子を集めて十念を授け、十五日、衆と共に彌陀の名號を唱へ、日沒に至りて寂す、壽八十三、臘六十六、同月十八日、天王寺に荼毘す、實戒持律堅固、性剛直なり、常に謂ふ、佛家戒律を以て初入の門となす、方今釋氏たる者、晚餐酒を飲み、恬然として愧る色なし、是れ剃髮せる俗人の

み、何ぞ釋氏と稱するに足らんや、這の一事既に佛制に悖る、其餘は見るに足らざるのみと、其大坂に轉ずる時、年方さに七十八、徒歩して之に赴き、車馬の力を假らず、人皆驚歎す。

實戒、護摩供を修する六萬座、胎金諸會を修する一萬座、四箇の大法を修する十餘度、密灌圓戒を受くるもの三萬餘人、融通念佛を受くる者六萬人、三部の大法を受くる者百餘人あり、柳原護國堂、諸輪村長榮寺の二刹を造り、又丈六の阿彌陀立像、五大尊、十二天を造る、明治十九年十二月二十二日大僧正を贈らる。(日本佛家人名辭書、慈恩餘錄、寬海大師行業略記、愛知縣人物志)

### 五〇 白鳥鼎三

白鳥鼎三、名は即一、天籟と號す、曹洞宗の僧にして、熱田白鳥山第二十八世なり、文化二年正月二十八日愛知郡猪子石村に生る、幼にして穎異、年甫めて十一、白鳥洞外に従ひて祝髮受具す、長ずるに及びて游方歴叩し、回天、黃泉、風外の諸師に磨礪し、辛參苦習すること積年、復た白鳥に歸りて大潛の室に入り、終に其傳法の印記を得たり、乃ち六師觀音寺に住し、後名古屋福壽院、山崎黃龍寺等に移る、當時雲衲風を望みて歸仰し、到る處忽ち一叢林を爲す、安政六年遂に白鳥法持寺に住し、大潛の嗣となる、是より諸刹の請に應じ、遍く法施を行ひ、德望一宗に冠たり、明治二年永平の西堂と爲りて、衆納を董督し、祖廟に奉事すること數歲、次いで執事となりて、大に諸規を釐革し、宗風を興起す、六年大教院巡教師に任じ、權中教正

に補す、是より先、遠州秋葉寺を再建す、故に鼎三を以て中興の祖とす、人と爲り朴實、洒然として古徳の風あり、後城南清水の里に退隱し、日に佛典祖錄を講じ、後進を導くを以て務となす、亦詩を好み、年十三の比日課三十首を作る、明治二十五年十一月二十八日端坐して示寂す、世壽八十六、法臘七十六、白鳥山に塔す、其自像の贊に曰く、

禪板蒲團爲益友、春花秋月是良朋、更無心法向人說、一任他呼百不能。(天籟餘韻)

### 五一 諸嶽 突堂

諸嶽突堂、名は旃崖、無似子と號し、別に三界無頼といふ、曹洞宗の僧にして、總持寺獨住第一世なり、尾張名古屋の人、俗姓は平野氏、維新の後諸嶽と稱す、歲十四歲出家して、聖應寺曉林に師事し、後出遊して越後に到り、黃龍寺道契に仕へ、天保四年美濃に到り、全昌寺洞門を訪ひ、次に大阪に往き、風外を訪ふ、天保十二年風外京都に上り、眞如堂の子院に寓す、突堂隨侍して其教を受け、遂に印可を受く、弘化元年大慈山に移り、二年播磨龍海院に住し、安政四年加賀天徳院に轉住す、明治元年永平總持の二寺相争ふに方り、突堂其調和に力を盡し、遂に同三年大衆の推舉する所となりて、總持寺獨住第一世となる、勅あり、弘濟慈徳禪師の號、并に紫衣を賜ふ、十二年東國に巡化し、羽前の善寶寺に入り、八月二十四日同寺に寂す、世壽七十五、法臘六十二、著す所懶眠餘稿あり。(日本佛家人名辭書、愛知縣人物誌)

五二 林 海州

林海州名は楚棟一に拈華室と號す。臨濟宗の僧にして、大高長壽寺第八世なり。文化五年二月廿八日、美濃大野郡伊尾村に生る。九歳、州の多良の觀音寺に投じて大鵬に事へ。十六歳、尾張總見寺に到り、卓洲に謁し、參究數月にして印可を受く。十七歳、一たび郷里に歸り、十九歳再び總見寺に到り、卓洲に師事して、益々參究を事とし、大に大衆に重ぜらる。天保十二年、大高長壽寺に住するに及び、雲納四來し、尾藩の士大夫來りて參禪する者多し。安政元年、歲四十七、勅を奉じて參内し、近江永源寺に遷る。徒衆愈々聚り、門風大に改る。爾後、每歲諸寺の請に應じ、殆んど虛歲なし。當時幕府政を失し、國事多端なり、慶應元年、京に入りて、尊王攘夷を論じ、海内の志士と交を結び、屢々尾張侯に謁して國事を謀り、公卿の間に往來して、周旋宜しきを得たり。侯屢々物を賜ひて之を賞す。明治元年、侯の請に依りて尾張に至り、國內を巡教し、又侯の命を承けて、入鹿溺死者追弔大施食を脩む。侯布施金五拾兩を賜ふ。海州之を散じて貧民を賑恤す。侯も亦施場を開き、相對して救恤の盛なるを見る。二年、東福寺請ひて師家とす。海州其遊客雜沓して禪學を妨ぐるを以て、通天の楓樹を斬伐するを約して之を諾す。六年八月、東福寺住職となり、九年五月、少教正に補せられ、十二月中、教正に昇る。十一年四月廿一日、巡錫中美濃笠原湊雲寺に寂す。壽七十一、臘六十三、墓を長壽寺に建つ。初め明治の

初年、熱田の地に在る所の寺院を悉く他に移すの議あり。海州之を聞き、即夜藩主に謁を請ひて之を停めんことを力説し、又京師に往きて近衛公に説く所あり。議遂に寢む。是を以て熱田各宗寺院は其功勞を追想して年々報恩供養を營むを例とす。海州、性豪邁、果斷、幾を見る神の如し、常に外交の事に憤り、意時と合はず、己を持すること最も慎み、嫌を避けて、尼弟の謁見を許さず、其徒を教ふる、粗食を共にし、行乞するに身を以て率ふる。故に常に餘財あり、其長壽寺に來る、寺債二千餘兩あり、永源寺も亦壹萬餘の負債あり、皆爲めに辨濟の法を設け、悉く之を消却し、而して諸堂を修造す。維新の際、長壽寺々祿を失ひ、住職其梵鐘什寶を典賣す。海州之を聞きて舊に復せしめ、且つ自ら五十圓を捐て、償還の費を補ひ、又田數町を買ひて長壽寺永續の資となす。因りて同寺中興の祖に崇めらる。(日本佛家人名辭書、尾張國誌、名古屋人物史料)

五三 日 優

日優、字は惠戒、薩芸と號す。日蓮宗の僧にして、大光寺二十六世なり。俗姓は熊澤、尾張丹羽郡定水寺村の農喜兵衛の次子なり。年十二、近江長濱妙法寺に投じ、日教に従ひて祝髮し、法華を習ふ。未だ幾ならずして八軸皆通讀す。尋いで洛東山科學林に入り、文句席に進む。嘗て歌を嗜みて研習して歎ます。深く幽玄の思を究めんと欲す。適々別頭高祖傳を讀みて、愕然

として志を發し、是より歌を廢し、専ら台當の教觀を究む。時に年二十なり、遠く加賀立像寺日輝の徳風を仰ぎ、其門に遊ばんと欲して、歸省して父母に告ぐ、父偶々病に臥す、日優看護して傍を離れず、父其志を察し、激厲して往かしむ、翌年父歿す、日優悲感を懷き、深く其遺命を顧念して、倍々業を勉め、居ること八年、台教三部の奥旨に通じ、祖訓別頭の淵底を究む。時に或は日輝に代りて講説し、或は同志の爲に議論す、是に於て日輝其智解を嘉歎し、機辯を稱揚して、化他の講説を許す、依りて門下を辭して、長濱に歸り、日教を省す、日教慈愛尤も厚し、次いで郷に還り、母を慰問して、父の墳墓を拜す、適々名古屋に遊び、大光寺に寓す、住持日飛其學徳を欽じ、一房を末森山に構へ、官府に請ひて、祖師堂となし、日優をして之に居らしめ、呼びて菩提院といふ、而して請ふ所に赴きて講説を事とす、天保十一年正月法華通講を大光寺に開始し、三八の日を以て講日となす、聽者其機辯神悟に服し、集まる者都鄙に滿つ、十三年大光寺の席を繼ぎ、學徒を教誨して、倦む無し、院内書編の乏しきを憂へ、遂に明板の大藏經を購ひ、三年にして經藏成るを告ぐ、又其餘材を用ひて、末森に一堂及び僧房を建て、弘化三年九月大光を辭して、之に退隱し、塵事を絶ち、觀念讀誦の暇、歌を詠じて懷を遣る、自ら以て終焉の地と爲し、山に名けて小飛來峰と呼び、堂を改めて正隱堂といふ、妙法の通講中間祖書及び宗門の綱格を講説せしを以て、七年に涉り、此夏に至りて、畢る、尋いで又開經を講じ、説法品の半に至り、疾の爲に城下に出でて、醫藥に就き、歲暮山房に歸り、翌年仲春遂

に寂す、實に弘化四年二月二十三日なり、世壽三十五、僧臘二十四、歷祖塔廟の北邊に葬り、墳上一株の松を植えて、以て印塔に代ふ、蓋し遺命に依れるなり。(小飛來峯日優師傳)

#### 五四 葦名 日 周

葦名日周、珠山、安祥院と號す、法華宗妙滿寺派の僧にして、常德寺第二十四世なり、學才あつて歌を善くす、維新の後神佛合併の中、教院を置かるゝや、其院長に推さる、明治九年本山妙滿寺に住し、後退いて常德寺に閑居す、明治十六年七月故ありて、轉派して京都要法寺に住し、十七年三月十日同寺に寂す、墓は常德寺歴代の中にあり。(名古屋寺院誌・愛知縣人物志)

#### 五五 楞嚴院 覺了

楞嚴院覺了、名は秀盛、眞言宗の僧にして、名古屋の人なり、豊山千手院快盛の室に入りて、度を受け、豊山に學び、總持寺に住す、明治二十年十二月十五日選ばれて、大和長谷寺第五十四代の能化職に補す、二十三年八月二十二日寂す、壽七十五、著す所、五教章私記若干卷あり。(新義眞言宗史料)



五六 松平實因

松平實因、字は法泉、號を成果といふ、眞言宗の僧にして山城智積院第四十二世なり、俗姓は小島氏、後に松平氏を冒す、名古屋押切に生る、十歳、州の福生院實珉に就て剃髮し、天保五年智積院に登り、隆榮能化に師事す、後請ぜられて福生院に住し、安政六年智積院に於て堅義を勤修す、萬延元年長久寺に移り、元治元年灌頂を修す、明治七年少講義となり、累遷して中教正となる、十二年選ばれて智積院能化に晋み、十九年僧正に轉じ、長者に登り、大傳法院の座主を兼ね、主職にあること十一年、明治二十一年辭して尾張に歸り、二十二年十一月三十日京都千本大報恩寺に寂す、世壽七十、法臘六十なり。(新義眞言宗史料)

五七 關齋嶺

關齋嶺、名は道契、瑞應軒と號す、臨濟宗の僧にして德源寺第二世なり、熱田伊藤氏の子、性聰敏、幼にして出塵の志あり、十歳禪隆寺に於て燿染す、一日、書中萬頃荒田誰爲主と云ふ句を見て疑團氷消せず、發憤勵志、夙夜怠らず、年十六熊本見性寺に至り、蘇山に師事すること十八年、大事了畢の後、豐後臼杵多福寺に住す、藩主稻葉侯厚く之を崇信し、轉職改衣の資金を給せらる、明治元年蘇山の遺命に依り、來りて德源寺に住す、四方其德を慕ひ、錫を引く者

絶えず、又官吏紳士の來りて禪を問ふ者日に盛なり、四年妙心寺の法席を繼ぐ、當時維新庶政改革の秋なるを以て、教部省を設け、大教院を建て、各宗に管長を置かる、齋嶺大教正となり、初めて管長の職に就く、齋嶺寡言、常に默々として能く人を度す、全國各寺の請に依り、江湖會を營める事殆んど枚擧すべからず、二十年春諸國の香宿雲衲八百餘名を請し、末後の勝會を開き、且つ信徒の爲めに授戒會を設く、戒徒二千四百餘人、其盛なること未だ曾て有らざる所なり、二十三年冬毎歳の例に依り臘八大接心を修するの日、居士伊藤玄機、水野門水井上浮木、河村鐵關、矢野宗雄等に命じて古稀の賀を催さしめ、自ら謂ふ吾既に賀をなす、死すとも可也と、越えて十日疾起り、二十四年二月三日男女の信徒を招き、端坐して四句の誓願を唱ふると共に流焉として入寂す、六日德源寺に葬り、法眼圓明禪師と諡す。(瑞應老大師略傳)

八 森田悟由

森田悟由、字は大休、曹洞宗の僧にして永平寺第六十四代の貫主なり、尾張知多郡大谷村の人、森田常吉の第二子なり、七歳にして剃染し、名古屋大光院龍山泰門に従ふ、後江戸に出でて駒込梅檀寮に學び、既にして感ずる所ありて去りて當代の大徳崩崖奕堂に總持寺に參す、其錯槌を受くるもの多年遂に洞禪の堂奥に入り、明治二十四年前貫主瀧谷琢宗の後

を承けて永平寺に住す、爾來二十五年、謙徳年と共に愈高く、其徳風を景仰する者益々多し、平生東京芝公園内の永平寺出張所に起居し、宗務の閑暇ある時は、二本榎園禪寺内の庵室に閑居し、讀書、揮毫、坐禪三昧に日を送るを例とす、而して一年中各地方の巡教に維れ日も足らず、殆ど席煖なるに違あらず、時には連續三四月に及ぶことあり、大正四年一月下浣インフルエンザに罹り、療養中急性腸胃加答兒を發し、二月九日永平寺出張所不老閣に寂す、世壽八十二、遺偈に云はく、

耕雲種月、八十二年、脫落脫落、一箭離弦。

十三日芝青松寺に密葬を行ひ、後永平寺に葬儀を行ふ、悟由脫俗超凡、人稱して活善知識となす、伊藤博文嘗て政友會を組織し、金澤に遊説せる時、悟由を永平寺に訪ひ、憲法起草の苦心、日清戦役の難事等を談じて、過去の功績を列擧す、悟由默して之を聽き、博文を一瞥して曰く、功勳を談ずる者は、尙ほ是れ功勳邊に滯ほる、功勳を忘じ去りて始めて眞の功勳を建つる事を得べし、惜い哉、公は尙ほ是れ功勳邊に滯ほる、何ぞ一步を進めざると、然るに博文、今日は禪中の禪と、俗中の禪とを大に商量せんと云ふ、悟由聲に應じて、禪中の禪、俗中の禪、何ぞ此兩般の閑名目あらんやと喝破し、手を打ちて大笑せりといふ。(大阪朝日新聞一六四號、日本佛家人名辭書)

五九 岸上恢嶺

岸上恢嶺、字は痴堂、曠蓮社廓譽と稱す、天保十年八月八日を以て尾張名古屋に生る、年甫めて十三州の實瑞寺文嶺に投じて、髮剃す、安政元年江戸に遊び、増上寺に掛錫すること二年、一宗の譜牒を承け、後四方に周游して、徧く諸名宿に參し、故郷に歸りて、木村春樹の家に寓して大藏經を閱讀す、明治元年増上寺學寮に主となり、六年中講義となり、十三年少教正に累遷す。

恢嶺、嘗て宗學の久しく振はざるを憂へ、明治三年首唱して東西兩都に淨土宗教覺を設け、推されて東部司教となり、轉じて西部司教となる、教育の任に在ること十餘年、其薰陶を受けたる者甚だ多く、教網大に張る、十六年宇治平等院に主となり、十八年二月十五日を以て寂す、世壽四十七、法臘三十五、明治二十九年其功績を銓考して、正僧正を贈らる、著す所、選擇集纂註五卷、說教惟中策九卷、科註原人論講義五卷、隨意說教、悉曇體文、科註原人論、同増補、釋門小字彙、各一卷、因明入正理論講錄の遺稿等あり。(日本佛家人名辭書)

六〇 高須瑚璉

高須瑚璉、號は隱峯、其室を臥雲と呼ぶ、三河國幡豆郡寺津村の農天野重太郎の第三子にして、弘化三年四月を以て生る、性活達穎悟、年十二遠江國篠原村海藏院に入り、法道に就きて、落髮受具す、歳十六德源寺に掛錫し、蘇山の狼毒に接し、辛酸苦修、寢食を忘るゝこと、前後

二十年、事大成して、海藏院に歸住し、同寺十四世の法席を嗣ぐ、幾もなくして、鰲嶺の命を受け、來りて、德源寺副住職となり、鰲嶺に代りて、専ら學徒を錯鑿す、四方其德を仰ぎて、錫を引くもの絶えず、顯官紳士の參請するもの亦日に多きを加ふ、明治廿一年八月、偶々暇を得て、知多郡大野に海水浴を試み、留ること半旬、疾を得て歸り、醫藥を用ふること數周、此間病勢漸く進むと雖も、未だ嘗て學徒の參請を怠らず、又寺院信徒の招請を辭することなし、九月廿九日、疾倍々重く、遂に腦充血を發して昏睡し、人事を辨ぜざるもの十餘日、諸醫の力に依りて僅かに小安を得たり、十月十二日、朝肅然床上に起坐し、門中の諸老及び輪下の役員、檀徒六十人餘を枕頭に集め、囑するに、後事を以てし、午后侍者を召ひて、僧伽梨を改め、四衆に遺誡し、端然として寂す、世壽四十三、德源寺中に葬る。(臥雲老大師略傳、海藏院文書)

## 六一 關 實 叢

關實叢、名は定眞、謙光室と號す、臨濟宗の僧にして、德源寺第四世なり、嘉永四年正月元旦、筑後古川の庄に生る、父は杉伴藏、實叢は其第三子なり、後故ありて、關氏を稱す、實叢、天資聰明、機を見ること敏なり、然れども一見魯の如く、常に群童と伍して遊ぶことを好まず、超然何物をか思考するものゝ如し、故に郷人目するに、異童を以てす、歲十二、父に伴はれて、州の日輪寺に詣す、僧の竹影掃階塵不動、月穿潭底水無痕、と吟するを聞き、遂に出塵の意を決し、

父に請ひて、寺主九峰に師事せんとす、九峰之を異とし、自ら同州梅林寺羅山に介して、圓頂進具せしむ、服勤すること五載、夜々藩侯の師福岡先生の門を敲きて、漢學を究む、歲十七、德源寺鰲嶺の室に入り、狗子無佛性の話を提撕すること數年、一夜禪堂に坐して、曉鐘の聲を聞き、忽然として悟る所あり、爾來辛參苦修すること十餘年、大事了畢の後、東都に遊び、徧く碩學の門に出入して、諸子百家の蘊奥を探り、再轉して、梅林の巖頭に樹王の虎鬚を撫で、再來の稱を受く、明治十六年、豊後養賢寺に住す、十九年、本山教學の例を改め、大教養を設くるや、選ばれて、興學會長となり、後進育英の事に従ふ、二十四年、鰲嶺の命により、三世臥雲の後を承けて、德源寺に住し、道俗を陶鑄す、四方風を慕ひて來る者、織るが如し。

實叢、日常寡黙、白眼以て群有を度す、之れ蘇山の衣鉢なり、禪隆寺臨濟錄會、其他各地寺院の請を受けて、江湖會を營むこと數十回、至る所數千の四衆に圍繞せらるゝを常とす、十九年、妙心開堂式を擧げ、再住位に進む、三十二年、諸州の道俗に謀り、衆を督して、數萬の淨財を聚め、書院庫裡等を改造して、山門を完備し、遂に德源寺をして、東海第一の禪刹たらしむ、三十六年、業に推されて、管長となる、是に於て、盧山を還、江實相寺より招きて、法嗣たらしめ、三たび妙心に住す、爾后荒廢を興し、舊弊を矯め、銳意宗風を宣揚す、十二月、疾に罹り、東山半井病院に在る事百餘日、漸く癒ゆるに及び、衆の勸に従ひて、德源に歸臥、靜養す、會々本山に財政問題を惹起し、病を推して、巖起亂麻を截斷す、事緒に就くに及び、舊病再發して、三十七

年十月二十一日を以て寂す、世壽五十四、二十三日四衆全身を奉じて洛北蓮花谷に荼毘し遺骨を德源寺歴世の塔地に葬る。(德源寺記録)

## 第十六 實業

### 一 伊藤蘭兮

伊藤蘭兮、名は祐壽すけひさ、小字は治郎四道幽の子にして、伊藤家第五代の主なり、元祿七年正月生る、享保二年歳二十四にして家を繼ぎて、次郎左衛門と稱し、元文三年十一月、從來營める所の吳服小間物問屋業を廢して、専ら吳服太物の小賣業に更む、乃ち店規を制し、店員の職守を定め、嗣子祐圭すけかみをして金銀入帳役たらしめ、自ら店務を主宰して倦まず、一家を擧げて業務に勵精す、同五年始めて尾張侯の吳服御用を命ぜらる、延享二年退隱して雪庵蘭兮と號す、然るに其子六、七、八代の主皆多病にして早世す、依りて陰に家業を佐け、同年六月京都に仕入店を設く、蘭兮父の性を慕けて豪毅沈勇なり、而して又謠曲、鼓を善くす、嘗て其五子祐潛すけひその爲に佐々部氏の女を娶る、婚約成るや、自ら意匠を凝らして一種の帶地を案出し、工をして之を織らしめ、以て納徴となす、偶々其帶地時好に適して一時に流行し、蘭兮織の名喧傳して今に至る、寛延三年三月九日歿す、享年五十七、光明寺中區白川町に葬り、圓相道音居士と法諱す。(伊藤家略記)

## 二 伊藤斧山

伊藤斧山名は祐<sup>ナツ</sup>惠<sup>ノ</sup>字は子澤、斧山は其號なり、本氏は荒木、其母は伊藤氏の女なり、依りて入りて伊藤氏を冒し、寶曆十三年九月、家を繼ぎて伊藤家十代の主となり、次郎左衛門と稱す、明和四年十一月、居宅を西隣に構へ、以て店舗との區別を立つ、五年四月、江戸上野松坂屋を買収して支店となす、九年に至りて火く、依りて直に工を起し、安永元年新築工成りて開店す、安永十年名古屋本店全焼す、天明二年本宅先づ成り、寛政元年店舗竣工す、天明八年京都の店舗火け、寛政三年再築落成の日、江戸支店又火災に罹る、斧山毫も意とせず、自ら江戸に赴きて災後の經營に當る、而して家を繼ぎしより屢々御用金の事あり、斧山人と爲り、商事に通じ、又風流を解す、家訓録を編して、之を本支店に備へ、店員をして之を服膺せしむ、寛政八年二月、家を長子祐躬に譲り、一切の繁務を避けて、賦詩點茶を樂とし、悠々自適して、自ら京都を以て終焉の地と定む、時の畫人圓山應舉は其友とし、善き所なり、文化四年二月二十日歿す、享年六十九、光明寺に葬り、湛譽然空道輝大徳と法諡す。(伊藤家略記)

## 三 安藤善祐

安藤善祐通稱は柏屋小兵衛、老後善祐と改む、名古屋船入町の豪商なり、愛知郡荒子村に

生る、幼にして父母を喪ひ、叔父某に鞠育せらる、一日私かに思へらく、家を起さむには商となるに若かずと、依りて商家に仕へむことを請ふ、叔父其志の固きを知りて之を許す、乃ち傳馬町前田某の家に仕ふ、前田氏は十人衆と稱する所の舊家なり、善祐人と爲り勤勉にして儉素を尙び、忠實にして私なし、主家に在ること二十年、刻苦精勵して業に服し、主家の業爲めに繁盛を來たす、既にして別家するの期至る、善祐其主に告げて曰く、僕熱々主家の經濟を親ふに、入る所出る所を償ふに足らず、此の如くなれば數年を出でずして、恐らくは傾覆を免れじ、僕之を知りて安んじて去ること能はず、願くば更に家政を改革せよ、僕亦努力回復を計らむと、是より一家を主宰し、益々業に勉む、居ること三年、業榮えて家豊なるに至る、善祐曰く、今は心を安んずべしと、乃ち主家の柏屋の號を受け、一戸を丸屋河渡に構へ、蠟油砂糖の類を商ふ、所謂問屋と稱するものなり、而して其篤實にして、一旦約せることを違へず、且事を處する敏速なるを以て、深く人の信賴を博し、數年を出でずして業大に榮ゆ、是に於て大阪に支店を設け、益々業務を廣め、柏小の名關西に轟く、藩主勝手用達を命じ、富府下に鳴る、其人を用ふるや、善く肺腑を洞觀し、能に任じて疑はず、偶々小過あるも一言戒飭を加ふるのみ、是を以て皆自ら省み、樂みて其用を爲す、明治七年二月二十二日歿す、享年八十五、長徳寺<sup>西區皆戸町</sup>に葬り、釋善祐と法諡す。(汲古)

## 四 鈴木才造

鈴木才造、才叟、又在草庵と號す、小字は源三郎、名古屋傳馬町の商八一屋小八の子なり、鈴木氏に養はれて惣九郎と稱し、家を繼ぐに及びて惣兵衛と改む、鈴木氏は世々材木商にして、俗稱材惣を以て知らる、五世惣兵衛、初め惣助と稱し、退隱の後了眞と號す、人となり膽略ありて商機に敏なり、文化の初名古屋東本願寺別院再建の事あるや、菩提寺に詣りて、己れ一代改宗の允許を得、乃ち眞宗の信徒となりて京に赴き、法主達如に謁し、名古屋別院再建に要する所の木材は、悉く之を納るゝの約諾を得て還り、直に木曾山林を買収して巨利を博せり、長子惣兵衛、家を繼ぎて六世の主となり、次子は別に家を分ちて木屋惣三郎と稱し、退隱の後松藏と改む、共に遊蕩に耽り豪奢の遊をなし、家運漸く將さに傾かんとす、六世惣兵衛一男一女あり、男は早世す、依りて其女を以て才造に配し、以て家を繼がしむ、才造慧敏にして明識あり、善く其業を勉め、孜々として家運を挽回す、慶應三年洋物改所の設けらるゝや、才造之が締方となる、又伊藤、關戸、花井の諸氏と共に通商會所を起し、或は爲替會社を創め、明治維新後の實業、經濟の發展に資す、而して業務の暇、明治初年新刊の著書は概ね購ひて之を讀み、以て世の大勢に通ずるに務めたり、嘗て時世の變遷を察して、横濱より鳥銃數千を購ひ、忽ち一萬兩を利す、又人と共に米穀を買ひて、各々八千兩の利を博す、而して其

益する所の金を以て資本となし、別に店舗を設けて綿絲の輸入を創む、偶々之が爲に損を招き、失ふ所四萬兩に達す、然も以て多く意となさず、八年三月家を養子惣兵衛に譲り、前津龍門の別莊に隱退して更めて才造と稱し、専ら茶事を以て樂とす、龍門園は昔俳人曉臺の經營に係り、文久中才造の買ひて別業とせる所なり、明治二十四年一月二十六日歿す、享年六十九、光明院西區花車町に葬り、龍門顯徳居士と法諡す。

## 五 富田重助

富田重助、名は重政、尾張海西郡江西村の人なり、父は神野重連、母は三輪氏、年甫めて十五富田永仙に養はれて其嗣となる、遠祖宇佐美祐茂源頼朝に仕へて功あり、封を伊豆宇佐美に賜ふ、因りて氏とす、後世河内に徙り、四郎正安、楠正成に従ひて湊川に戦死す、子孫伊勢に徙り、又尾張に徙りて知多郡古見村に住し、氏を富田と改む、永仙に至りて名古屋に出でて賈を業とし紅葉屋と號す、安政元年永仙歿して重助後を承く、其年少なるを以て重連之を補佐し、始めて西洋貨物を鬻ぐ、購ふ者市の如く日に傳る所數千圓を下らず、官に請ひて米英佛魯の人と互市し、又江戸大坂横濱、及び三河伊勢紀伊加賀越中の十餘州と相轉輸す、是に於て紅葉屋の名一時に鳴り、世の人其洋貨の大賈なるを知らざるなく、數十年を出でずして遂に巨富を致す、然れども其間鎖攘の論大に起り、幕府を咎め、洋人を憎み、遂に併せて

其貨を鬻ぐ者に及ぶ、一夕數人あり白刃を揮ひて闖入し、有る所の絨布悉く割截斷裂して去る、重助此間に處して毅然として業を營み、亦一身の安危を顧みず、其業益々盛なるに至りて一旦病みて歿す、時に明治九年九月十七日なり、享年四十、安用寺中區門前町に葬り、秋山楓翁居士と法諱す、人と爲り溫柔慈祥、人の求むる所あれば拒むに忍びず、衆稱して善人と爲す、子吉太郎嗣ぐ、甫めて五歳亦重助と改む、弟神野金之助家を攝す。(再文)

六 村松彦七

村松彦七、弘化二年江戸日本橋三河町に生る、家兩替を業とす、明治元年小野組雇員となり、小野組の額田縣に支店を開設するや、擇ばれて其副支配人となりて岡崎に來る、後額田縣の廢せらるゝに際し、愛知縣小野組爲換店の主任となり、名古屋に來りて事務を執る、明治七年の頃小野組閉店するに及び、善く其後を處理して其主任を辭す、後岡谷惣助と謀りて愛知七寶會社を起し、其社長となり、十二年米國博覽會の開かるゝや、渡航して木縣産物の販賣に力を盡す、十四年佛國大博覽會の開かるゝ、亦渡航して縣下産物の販賣に力む、而して博覽會事務總裁松方正義と共に英國に渡り、紡績器械を購入し、歸朝の後之を名古屋及び三河大平、伊勢川島の三所に配置して以て大に紡績事業を起す、後正金銀行取締役となり、十八年一月三十日名古屋本重町の家に歿す、享年四十一、長圓寺中區水主町に葬り、釋道味居

士と法諱す。(名古屋人物史料、長圓寺過去帳)

# 第十七 好古鑒識

## 一 矢田作十郎

矢田作十郎、名は助吉、尾張の士なり、其先は三河の人、始祖助兼掃部と稱し、後入道して道蓮と號す、松平清康、廣忠の二世に仕ふ、孫助吉、作十郎と稱し、廣忠及び家康に仕へ、寛助太夫、蜂屋半之丞と共に驍勇を以て名あり、武田信玄、之を見んことを欲すれども得ず、故に畫工をして三河に來り、其貌を寫さしむ、家康命じて曰く、作十郎、軀幹矮小なり、坐容を寫さしめて、必ず立ちて畫工に對すべからずと、平生金鯉の冑を戴きて陣に臨む、敵軍之を怖れ、世を舉りて金鯉の勇を知らざるなし、後其冑を蜂屋に與ふ、蜂屋敗走す、作十郎大に怒り、蜂屋と隙あり、永祿六年、本願寺の賊僧亂を起す、作十郎其門徒たるを以て之に與みし、戰ひある毎に先登して、徳川氏の軍を破る、十一月二十五日、小豆坂の戰に、作十郎先鋒たり、家康左右に命じて銃して之を噎さしむ、孫重時始めて尾張に仕ふ、長子某歿して嗣無く、家絶ゆ、次子嘉重、作十郎と稱す、貞享元年、新番となりて俸を賜ふ、子重秀、源助と稱す、元祿九年、留書となりて俸を賜ひ、寶永二年、瑞祥院大夫人吉蓮の室の侍となる、即ち作十郎の父なり、作十郎其祖の名を用ひて亦助吉といふ、享保十三年八月三日、俸を賜ふ、十七年三月、五十人組となりて俸を増

され、十九年四月、小普請組に入りて二口俸を賜ふ、常に刀劍を愛し、尤も鑑識に精し、畢生身を水雲に比し、心を刀相に寄せて逍遙す、子某先ちて歿し嗣無し、老後藩士堀田十郎兵衛に寄り、以て身を終ふ、實に天明五年五月二十八日なり、長徳寺皆町西區戸に葬り、淨善院惠日居士と法諡す、嘗て其愛藏せる所の刀を熱田神宮に獻じて之を神庫に納る、人稱して曰く、矢田氏身後其名刀の所を失はんことを憂へ、之を神宮に獻じて寶器を千載に遺すと、(士林深淵、松濤棹筆、長徳寺過去帳)

## 二 恒川 蓼 露

恒川蓼露、初めの名は了呂、不染庵と號す、安永四年十二月四日生る、性古筆を好み、寛政九年古筆了意の門に入りて鑒定法を學ぶ、尾張侯其鑒識に長ずるを聞き、文政六年小納戸用達を命じ、尋いで手當金を賜ふ、十一年俸三口を賜ひ、小納戸頭取支配とし、苗字を許し、尋いで又目見、慰斗目着用、帶刀を許さる、後剃髮して白無垢着用を許され、俸二口、雜用金を賜ふ、藩用の爲に江戸に下りしこと數々なり、嘉永元年故ありて辭し、萬延元年八月十八日歿す、享年八十六、梅香院中區梅川町に葬る、(汲古草稿)



# 索

# 引

好古鑿識 恒川淡水

## 三 恒川淡水

恒川淡水、通稱は嘉七、熱田の神宮大喜氏の子なり、蓼露に養はれて其家を嗣ぐ、本春田屋と稱せしを以て春佳を稱號とす、古筆鑿定を父に學び、博聞強記人に過ぐ、明治四十二年二月二十一日歿す、享年九十一、寶珠院中區白川町に葬り、則心淡水と法諡す。(後古)

- 一、本索引は五十音順に排列す。
- 一、假名遣は發音假名遣に據る。
- 一、ウ列オ列の長音は總て「ウ」を用ひて排列す。
- 一、濁音半濁音は清音の場所に排列す。
- 一、「井はイ」「エはエ」「ヲはオ」「チはジ」「ヅはズ」「クワはカ」の場所に排列す。

ア

愛智範成	一ノ六	淺井篤太郎	二ノ四七	天木時中	二ノ三三	飯沼守明	二ノ六
愛智義成	一ノ六	淺井有隣	二ノ四八	天野信景	二ノ八七	庵原小園	二ノ三五
愛智義保	一ノ六	朝岡宇朝	二ノ四九	天野恬庵	二ノ三三	庵原存園	二ノ四四
青木可笑	一ノ三	朝岡重政	二ノ二	新井十右衛門	一ノ三四	庵原遊焉	二ノ四四
青木琴水	二ノ三五	朝岡柳昌	二ノ二	荒尾玉函	一ノ三四	猪谷只四郎	二ノ六
青木蒲堂	一ノ四三	朝倉景員	二ノ二	荒川定英	一ノ三九	井川鳴門	一ノ三六
青山陽城	一ノ四三	朝倉忠兵衛	二ノ七	荒木五助	二ノ三	以之	一ノ三六
西郡相嘉	一ノ五九	朝倉忠兵衛	二ノ九	荒木田壽山	二ノ三	丹羽以之ヲ見	一ノ三六
赤之御膳	二ノ四三	淺田春耕	二ノ三三	有園	二ノ四三	石井梧岡	二ノ三三
赤堀秀時	一ノ四六	淺田藤山	二ノ三四	有綱	二ノ四三	石井垂種	二ノ三三
秋足	野村秋足ヲ見	淺野春道	二ノ四六	有經	二ノ四三	石井孫藏	一ノ四六
章長	石川章長ヲ見	淺野青洲	一ノ四七	有信	二ノ四三	石井彌市	一ノ三七
淺井樺園	二ノ四六	淺野三龍	二ノ三	阿林	二ノ四三	石井隆茶	二ノ三三
淺井紫山	二ノ四六	朝日重村	二ノ八	山田阿林ヲ見	二ノ四三	石川章長	一ノ三三
淺井周頌	二ノ四六	朝比奈玄洲	二ノ二	山田安亭ヲ見	二ノ四三	石川香山	二ノ三三
淺井周頌	二ノ四六	朝比奈如有子	二ノ二	安藤善祐	二ノ四三	石川是鶴堂	一ノ四六
淺井節軒	二ノ四六	味岡守恒	二ノ五	安藤勝助	一ノ四三	石川不成	一ノ四六
淺井周迪	二ノ四六	葦名日周	二ノ三	安藤善祐	二ノ四三	石川正光	一ノ三三
淺井茅淳	二ノ四六	蘆邊田鶴丸	二ノ四	飯島光重	一ノ三三	石川眞清	二ノ三七
淺井貞庵	二ノ四六	安達元長	二ノ四	飯田高嶺	二ノ三七	石川光忠	一ノ三三
淺井道順	二ノ四六	安孫子靜逸	一ノ三	惟一	二ノ三七	石川吉信	一ノ三三
		阿部伯孝	一ノ三		二ノ三七	石川魯庵	二ノ三三
						石黒濟庵	二ノ三五

イ (井)

石河忠喜	一ノ三五	一色幽蘭	一ノ五二	稲葉通邦	二ノ八二	植松茂岳	一ノ一六六
石河正章	一ノ三四	一 溪	吉川一溪ヲ見ヨ	稲 守	野村稻守ヲ見ヨ	鶴岡園齋	二ノ三六
石河光當	一ノ三五	一 幸	狩野一幸ヲ見ヨ	井上士朗	二ノ五九	雨 橋	水野雨橋ヲ見ヨ
石田素陽	二ノ四六	一國齋	澤木一國齋ヲ見ヨ	井上彌五兵衛	一ノ三六	羽 洲	松浦羽洲ヲ見ヨ
石堂竹林	二ノ一	一色長嶽	二ノ三九	稻生重政	一ノ三〇	氏 勝	山下氏勝ヲ見ヨ
石橋藤窓	二ノ一五	一松堂	藤井齋ヲ見ヨ	稻生政陳	一ノ三九	氏 豐	今川氏豐ヲ見ヨ
石原存古齋	二ノ元一	逸筆坊鶴砂	二ノ三八	伊部義成	二ノ二一	磯水重治	一ノ二六
石原正明	二ノ二九	伊藤圭介	二ノ二四	今川氏豐	一ノ七	内田成之	二ノ八
伊豆原麻谷	一ノ八四	伊藤三橋	二ノ三七	岩井正齋	一ノ七五	内 遣	木居内遣ヲ見ヨ
磯谷清洲	二ノ二七	伊藤子元	一ノ八八	石作駒石	二ノ二一	宇 朝	朝岡宇朝ヲ見ヨ
磯 足	加藤磯足ヲ見ヨ	伊藤而後	二ノ四〇	岩 之 丞	一ノ七四	宇津木昆臺	二ノ五〇
磯野漢齋	二ノ三二	伊藤翠雲	一ノ四八	岩本儀兵衛	二ノ五九	宇都宮三郎	二ノ四四
磯村千春	二ノ二六	伊藤天説	二ノ五三	鈞 園	宮崎鈞園ヲ見ヨ	宇都宮綱根	二ノ四四
市江風造	一ノ四九	伊藤直之進	二ノ七	上田甲斐子	二ノ五七	宇都宮尙綱	二ノ六
市岡猛彦	二ノ三三	伊藤芳山	二ノ二四	上田桃逸	一ノ四七	雨 艇	加藤雨艇ヲ見ヨ
市岡陸子	二ノ三三	伊藤墨海	二ノ三	上田仲敏	二ノ四七	雨 田	大道寺雨田ヲ見ヨ
市川君泉	一ノ三六	伊藤孫六	二ノ三九	植松有圓	二ノ一六	浦井替湖	二ノ六一
市川甚左衛門	一ノ四四	伊藤蘭兮	二ノ三九	植松有經	二ノ一七	浦野布磧	二ノ三七
市川東齋	一ノ七六	伊藤雨村	二ノ三九	植松有信	二ノ一七	浦 速 也	二ノ二九
市野天齋	二ノ三四	株 姫	一ノ六二			雲 溪	木村雲溪ヲ見ヨ
市橋新内	二ノ三七	稻垣將監	一ノ三〇			雲 里	楠本雲溪ヲ見ヨ

エ (エ)

永安	小出永安ヲ見ヨ	大口綱二	二ノ二六	太田巴靜	二ノ三〇	岡田野水	二ノ三七〇
瀧 洲	横井瀧洲ヲ見ヨ	大口雄山	二ノ一九	太田半右衛門	二ノ二〇	岡部孝之	二ノ七一
江上純常	一ノ三六	大窪光風	二ノ四六	大津北圃	二ノ三三	岡部藤左衛門(忠次)	二ノ七
江崎元十郎	一ノ四二	大窪安治	二ノ四九	大鶴活庵	二ノ四八	岡本梅英	一ノ四〇〇
江崎市郎右衛門	一ノ四二	大熊免農	二ノ四〇	大野藤五郎	一ノ四九	岡谷宗純	一ノ四〇二
越 人	佐分利越人ヲ見ヨ	大藏七左衛門	一ノ四三	大野時太郎	一ノ四九	御前安本	二ノ三七七
惠 了	釋惠了ヲ見ヨ	大藏二右衛門	一ノ四三	大野友七	一ノ四九	小 河 鼎	二ノ二九五
圓 空	深田圓空ヲ見ヨ	大藏仁左衛門	一ノ四三	大野彦七	一ノ四九	小川重一	一ノ三七八
猿猴庵	高力種信ヲ見ヨ	大河内存真(重徳)	二ノ四二	大野彦次郎	一ノ四九	小河沼南	二ノ二九六
圓珠庵羅城	二ノ五二	大河内存真(重昌)	二ノ四二	大橋紳堂	二ノ四七	萩野重道	二ノ二七
圓 陵	宮田圓陵ヲ見ヨ	鷺 谷	奥田鷺谷ヲ見ヨ	大屋孫彦	二ノ四七	萩野知一	一ノ四三
		鷺 砂	逸筆坊鷺砂ヲ見ヨ	小笠原監物	小笠原吉光ヲ見ヨ	沖野南浜	二ノ三三
		大澤無手右衛門	二ノ六	小笠原吉光	一ノ三七	奥田鷺谷	二ノ二九
		黃 山	吉原黄山ヲ見ヨ	岡田市郎左衛門	一ノ三四〇	奥田香雨	二ノ三三
大石眞虎	一ノ三六	大島爲足	二ノ一五	岡田九响	二ノ三六	奥田大親	二ノ二七
大江尾京	二ノ三四	大島爲龍	二ノ一五	岡 田 啓	二ノ三六	奥田常雄	二ノ一八〇
櫻 園	大島爲足ヲ見ヨ	大田宜春堂	二ノ二七	岡田新川	二ノ三六	奥田桐園	二ノ二九〇
櫻 園	大島爲龍ヲ見ヨ	大田什安	二ノ三七	岡田高嶺	二ノ三三	奥田大和	二ノ一八一
大 鐘 萬	二ノ二六	太田忠藏	二ノ三	岡田帶刀	二ノ四四	奥田亮齋	二ノ二九〇
大木野處	二ノ四九	大前高門	二ノ三	岡田梅間	二ノ四四	奥野碧潭	一ノ三九五
						奥村榮教	二ノ五〇三

オ (オ)





三丘	横地三丘子見	時中	天木時中子見	志水忠繼	一ノ三六
三橋	伊藤三橋子見	芝椿	永井芝椿子見	志水忠政	一ノ三三
三荷亭	神村正郎子見	赤	人見磯色子見	志水忠宗	一ノ二三
山雪	木田山雪子見	實因	松平實因子見	志水忠榮	一ノ二四
三楓	大野三楓子見	實成	洞松實成子見	志水忠休	一ノ二五
		實叢	關實叢子見	志水忠美	一ノ二九
		子東	松下子東子見	志水忠平	一ノ三三
		篠塚力壽		清水成利	一ノ三九
紫雲齋	東方令達子見	柴田洞元		清水宜昭	一ノ四八
柿園	吉川季廣子見	柴田芳洲		志水正昭	一ノ五八
芝岳	佐藤忠泰子見	柴田敏彦		志水宗秀	一ノ二五
止求	島澤武敬子見	司馬盈之		清水雷首	一ノ二六
慈空	二ノ五九	柴山東密		新武屋紋左衛門	一ノ五五
自敬軒	山本自敬軒子見	司馬老泉		下郷學海	一ノ三三
茂岳	植松茂岳子見	島澤九右衛門		下里知足	一ノ三六
重親	千賀重親子見	島澤莊兵衛		下郷輝羽	一ノ三六
重綱	渡邊重綱子見	島澤武敬		下間盤谷	一ノ三五
重松	一ノ三六	島澤恒年		下山順一郎	一ノ四二
繁谷清六	一ノ三三	島澤正勝		沙鷗	一ノ四九
而石	伊東而石子見	清水觀綱		釋惠了	一ノ四九
芝石	西川芝石子見	清水香流		車友	一ノ四九
士前	永井士前子見	清水丈山		秀雲	一ノ四九

松隆	植松茂岳子見	心空菴	平尾敷也子見	杉山見心	一ノ四八
松隆亭	眞野時綱子見	震齋	高木凝式子見	杉山玄洞	一ノ四七
松園	國枝松園子見	慎齋	宇都宮尚綱子見	杉山三右衛門	一ノ四
松園	成田松園子見	慎齋	深田慎齋子見	杉山梅園	一ノ三六
松園	阿部伯孝子見	眞實	鈴木眞實子見	杉山物春	一ノ三九
松下庵	横井久時子見	新川	岡田新川子見	助高屋高助	一ノ四二
松兄	木原居松兄子見	神野齋		相嘉	一ノ四二
常齋	柏谷常齋子見	神野中洲		鈴木展	一ノ三二
少汝	二ノ四〇			鈴木乾堂	一ノ三三
性俊	二ノ五一	ス		鈴木伍草	一ノ三〇
丈草	僧文章子見	醉雨	吉原醉雨子見	鈴木才造	一ノ二六
定尊	二ノ五九	翠雲	伊藤翠雲子見	鈴木重春	一ノ二六
松瀨居	奥村得義子見	醉月園	森嘉基子見	鈴木重之	一ノ三六
祥鳳	二ノ五九	瑞齋	梶原昭豐子見	鈴木常明	一ノ三三
如雲	田宮如雲子見	季範	藤原季範子見	鈴木清右衛門	一ノ三六
福園	大口福園子見	須賀精齋		鈴木春隆	一ノ四三
謙齋	二ノ六一	菅谷順澄		鈴木久亮	一ノ二二
恕齋	横井久時子見	須賀亮齋		鈴木眞實	一ノ二二
士期	井上士期子見	杉立権右衛門		角田青溪	一ノ二五
普庵	兒玉普庵子見	杉立信吉		純姬	一ノ八五
柳園	伊部義成子見	杉本蘭泉			
棟園	本居内遠子見				

七

單見來山	一ノ三七
西崎	岸上西崎子見
晴雲	神谷晴雲子見
西園	兼友西園子見
清雅	林良益子見
清狂	西村清狂子見
清溪	角田清溪子見
清溪	横地清溪子見
清齋	佐藤清齋子見
清齋	橋本清齋子見
正齋	岩井正齋子見
精齋	須賀精齋子見
靖山	島澤恒年子見
青洲	淺野青洲子見
清洲	一ノ五八
靜處	大木靜處子見
星清	永井星清子見
井南	本多井南子見
政甫	小澤政甫子見

西來居未佛	二ノ四六	全朝	加藤延隆子見	高木凝式	二ノ四六
是鶴堂	石川是鶴堂子見	船樹	神波船樹子見	高木秀條	二ノ三七
關元	洲	占秋舍	寺山吾鬘子見	高木秀矩	二ノ三三
關繁	嶺	劍姫		高木翁洞	二ノ九六
石齋	高橋石齋子見			高木吉和	二ノ二五
關實	齋			高木吉近	二ノ三三
關祖	洲			高木吉任	二ノ三三
石鼎	吉田石鼎子見			高木吉頼	二ノ三三
夕道	長谷川夕道子見			高島兼川	二ノ三六
關戸内兄				高須崎雄	二ノ六九
關戸信俊				高田伊右衛門	二ノ四四
石蘭	奥村石蘭子見			高田伊三郎	二ノ四四
是空	森崎是空子見			高田清貞	二ノ二二
是滿				高田清將	二ノ二〇
雪居	山邊雪居子見			高田九八郎	二ノ四三
拙齋	長谷川敬子見			高田九郎三郎	二ノ四三
雪朝齋	渡邊清子見			高田自眉	二ノ四三
仙果	笠亭仙果子見			高田善次郎	二ノ四三
千賀重親				高田大郎庵	二ノ四六
千賀信立				高田長左衛門	二ノ四六
千賀信親				高田平吉	二ノ四三
千齋	木村千齋子見			高田宗房	二ノ三三
存古齋	石原存古齋子見				

高田快清	一ノ二七	竹乃屋	中尾義裕子見	田中不二郎	一ノ三三
高橋玄仙	二ノ四七〇	竹村鶴雙		田中道隆	二ノ二五
高橋石齋	一ノ三六三	竹村通央	二ノ二七	田邊八左衛門	二ノ四九
高間春清	一ノ三五五	忠曉	瀧川忠曉子見	種武	佐枝種武子見
真由	山村真由子見	忠純	鬼頭忠純子見	種信	高力種信子見
瀧川忠曉	一ノ二〇二	忠繼	志水忠繼子見	種榮	佐枝種榮子見
瀧川忠征	一ノ一〇五	忠廣	萩忠廣子見	玉井意深	一ノ三九
瀧の屋	渡邊直房子見	忠政	志水忠政子見	玉井翁	高木翁子見
瀧本土休	一ノ四八〇	忠征	瀧川忠征子見	玉翁翁	高木翁子見
卓洲	二ノ五八八	忠宗	志水忠宗子見	民彦	水谷民彦子見
建稻種命	一ノ一	忠梁	志水忠梁子見	田宮如雲	一ノ二七〇
竹田三登	二ノ四六九	忠休	志水忠休子見	田宮中兵衛	一ノ二五五
竹田三碩	二ノ四六九	忠吉	松平忠吉子見	爲隆	吉村爲隆子見
竹田晨正	二ノ一八二	忠喜	石河忠喜子見	足彦	加藤足彦子見
竹内塊翁	二ノ四〇三	龍豐	山澄龍豐子見	垂種	石井垂種子見
竹内修敬	二ノ五八八	立松義寅		太耶庵	高田太耶庵子見
竹腰佐緒	一ノ四八四	田中雁宕		澹淵	中西淡淵子見
竹腰成方	一ノ三二七	田中源之丞		澹齋	和田澹齋子見
竹腰正信	一ノ二二四	田中訥言		端山	大口端山子見
竹腰三信	竹腰成方子見	田中尙房		淇水	木全雅直子見
武野新右衛門	武野仲定子見	田中尙平		千秋	横井千秋子見
武野仲定	一ノ四六六	田中百一郎			

忠 征 尾崎忠征子見ヨ  
 蝶 羽 下郷蝶羽子見ヨ  
 長 翁 水室長翁子見ヨ  
 張 月 三宅長翁子見ヨ  
 島 三 水野鳥三子見ヨ  
 長 嶽 一色長嶽子見ヨ  
 張 振 南 高木秀條子見ヨ  
 椿 庵 水室長翁子見ヨ  
 珍 牛 二ノ五七六  
 支 餐 一ノ四九二

津田 應圭 一ノ五七六  
 津田 權之丞 二ノ五〇六  
 津田 種積 二ノ三二二  
 津田 正生 二ノ三〇〇  
 土屋 元高 一ノ四九〇  
 都築 九郎右衛門 都築泰觀子見ヨ  
 都築 泰觀 一ノ二二四  
 維 君 一ノ八七  
 綱 誠 德川綱誠子見ヨ  
 綱 光 渡邊綱光子見ヨ  
 常 雄 奥田常雄子見ヨ  
 恒川 重富 一ノ四四六  
 恒川 重紀 一ノ四四五  
 恒川 重房 一ノ四五四  
 恒川 重吉 一ノ四四三  
 恒川 淡水 二ノ三三三  
 恒川 容谷 一ノ三六四  
 恒川 平藏 一ノ四三三  
 恒川 繁露 二ノ三三二  
 坪井 杜國 二ノ三七一

テ

貞 庵 淺井貞庵子見ヨ  
 汀 庵 鈴木丁庵子見ヨ  
 汀 齋 竹村通央子見ヨ  
 鼎 江 平野泥江子見ヨ  
 鼎 三 白鳥鼎三子見ヨ  
 寺尾 左馬助 寺尾直政子見ヨ  
 寺尾 土佐守 寺尾直政子見ヨ  
 寺尾 直政 一ノ三三二  
 寺 倉古史 二ノ一七三  
 寺田 玄六 一ノ四五一  
 寺田 左門 一ノ四四二  
 寺田 左門治 一ノ四四二  
 寺田 門治 一ノ四四〇  
 寺田 六郎 一ノ四四二  
 寺西 我竟 二ノ二二四  
 寺山 吾鬘 二ノ二二五  
 照井 曾洛 二ノ四四四  
 天 頼 市野天頼子見ヨ

ト

桃 進 上田桃進子見ヨ  
 稻 羽 神谷永平子見ヨ  
 東 園 尾關東園子見ヨ  
 東 恭 鬼頭蓮恭子見ヨ  
 東 谿 市川東谿子見ヨ  
 東 軒 淺井周迪子見ヨ  
 陶 齋 平澤陶齋子見ヨ  
 藤 山 淺田藤山子見ヨ  
 洞 松貫 二ノ五九八  
 冬 青 一ノ三七三  
 桃 島 野呂桃島子見ヨ  
 東 亭 竹村通央子見ヨ  
 道 傳 山本道傳子見ヨ  
 東 南 内藤東南子見ヨ  
 桐 峰 二ノ五五三  
 遠 山寛齋 二ノ二六二  
 桐 業 林桐業子見ヨ  
 桐 陽 木曾桐陽子見ヨ  
 東 譽 柴山東譽子見ヨ  
 藤 蘭 宇 二ノ四七四

ツ

冢田 謙堂 二ノ二八二  
 冢田 大栄 二ノ二七七  
 津金 只左衛門 二ノ二〇〇  
 津金 胤臣 一ノ二六六  
 津金 理兵衛 二ノ四六六  
 繼 友 德川繼友子見ヨ

杜 國 坪井杜國子見ヨ  
 戸崎 南亭 二ノ三三三  
 戸澤 左近 一ノ四三三  
 戸田 勉室 二ノ三三三  
 訥 言 田中訥言子見ヨ  
 訥 齋 水谷訥齋子見ヨ  
 圓 南 淺井圓南子見ヨ  
 舍人 葵園 一ノ三六八  
 舍人 重巨 二ノ五〇二  
 免 農 大熊免農子見ヨ  
 富田 畦臣 二ノ二二〇  
 富田 重助 二ノ二六七  
 富永 幸陽 神島梅雪子見ヨ  
 富永 南成 二ノ二二八  
 友 重 松平友重子見ヨ  
 友 著 松平友著子見ヨ  
 知 信 吉川知信子見ヨ  
 鳥居 圓秋 二ノ五三三  
 鳥居 貞之 二ノ五三三  
 吞 屋 二ノ五三九  
 頓 齋 一ノ二四四

ナ

内藤 東甫 一ノ三六九  
 永井 禾原 二ノ三六五  
 永井 軍太郎 二ノ四四二  
 永井 士前 二ノ四二二  
 永井 芝椿 二ノ四二二  
 永井 星清 二ノ二九五  
 永井 梅翁 一ノ三三三  
 永井 光周 永井梅翁子見ヨ  
 長岡 爲慶 二ノ一八五  
 長岡 桃藏 二ノ一八四  
 長岡 義稻 (五左衛門房成) 二ノ一八六  
 中川 重藏 一ノ四四三  
 中川 重郎 一ノ四四三  
 中川 重藏 一ノ四四三  
 中川 重郎 一ノ四四三  
 中川 重藏 一ノ四四三  
 中川 清九郎 一ノ三三八  
 中川 梅岳 一ノ四四三  
 中川 政盛 一ノ三〇一  
 中川 正吉 一ノ四四三  
 永坂 周二 二ノ三三三  
 永坂 養二 一ノ四八五

中島 養忠 二ノ三二二  
 永田 泰山 一ノ四四五  
 仲 敏 上田仲敏子見ヨ  
 中西 淡瀾 二ノ三三三  
 長野 五郎右衛門 二ノ三三一  
 中野 重吉 一ノ二七四  
 中野 大朝 二ノ三九〇  
 長 則 織田長則子見ヨ  
 中野 龍田 二ノ二八六  
 中林 竹溪 一ノ三六八  
 中林 竹洞 一ノ三六一  
 長 登 織田長登子見ヨ  
 長松 貞雄 一ノ三三三  
 中 村 修 一ノ二二八  
 中村 九華 二ノ三九九  
 中村 厚齋 二ノ三三七  
 中村 習齋 二ノ三二八  
 中村 直齋 二ノ三三八  
 中村 得齋 二ノ三三八  
 中村 元勝 一ノ二九六  
 中村 元現 一ノ二九七  
 中村 又齋 一ノ四三二



中村又參	一ノ四三	成瀨正信	一ノ三七	西川鯉三郎	一ノ四六	日 周	葦名日周子見ヨ
中村綠泉	二ノ三六	成瀨正典	一ノ三七	西川芝石	二ノ四八	丹羽以之	二ノ三六
長屋忠左衛門(忠馬)	二ノ三	成瀨正則	一ノ三六	西原喜平次	一ノ四七	丹羽嘉言	一ノ三七
長屋忠左衛門(忠久)	二ノ二	成瀨正大	一ノ三六	西原鐵吉	一ノ四七	丹羽開齋	一ノ四〇
中山弘齋	二ノ三五	成瀨正幸	一ノ二九	西原伸吉	一ノ四七	丹羽賢	一ノ三三
中山七大夫	二ノ三三	成瀨之成	一ノ二二	西原伸太	一ノ四七	丹羽四郎	一ノ四六
中山梅軒	二ノ三三	鳴門	井川鳴門子見ヨ	西原仁兵衛	一ノ四七	丹羽南莊	二ノ三六
長屋六左衛門(忠重)	二ノ五	南 華	西尾南華子見ヨ	西原萬藏	一ノ四七	丹羽又吉	一ノ四六
長 嶽	一色長嶽子見ヨ	南 咳	富永南咳子見ヨ	西村敬義	一ノ四七	丹羽又五郎	一ノ四六
並河魯山	二ノ三三	南 湊	林南湊子見ヨ	西村敬元	一ノ四七	丹羽彌三郎	一ノ四六
齊 莊	德川齊莊子見ヨ	南 宮大湊	二ノ三五	西村敬光	一ノ四七	丹羽安次郎	一ノ四六
齊 朝	德川齊朝子見ヨ	南 宮龍湊	二ノ三六	西村敬長	一ノ四七	又	
齊 溫	德川齊溫子見ヨ	南 堂	吉雄南堂子見ヨ	西村庫敬	一ノ四七	沼田月齋	一ノ三九
成瀨長利	一ノ三六	南 堂	森川南堂子見ヨ	西村庄兵衛	一ノ四七	又	
成瀨長則	一ノ三六	南 堂	二ノ四二	西村清狂	一ノ四八	野口道直	二ノ四一
成瀨正住	一ノ三六	南 堂	沖野南堂子見ヨ	西山守賢	二ノ四八	野中坦軒	二ノ四〇
成瀨正親	一ノ三七	南 堂	二ノ四二	日 潤	二ノ五六	信 興	織田信興子見ヨ
成瀨正肥	一ノ三九	二階堂昇庵	一ノ四六	日 優	二ノ六〇	信 景	天野信景子見ヨ
成瀨正成	一ノ三九	西尾南華	一ノ四六	仁木白圓	二ノ三七		
成瀨正成	一ノ三六	西川九松	二ノ三六	日 耕	二ノ三六		

信 包	織田信包子見ヨ	梅 宇	織田梅宇子見ヨ	橋本清齋	一ノ三五	羽鳥春隆	一ノ四〇
信 孝	織田信孝子見ヨ	梅 英	岡本梅英子見ヨ	巴 雀	武藤巴雀子見ヨ	馬場永吉	一ノ三七
信 綱	渡邊宜綱子見ヨ	梅 園	杉山梅園子見ヨ	馬 州	白梵庵馬州子見ヨ	馬場守信	二ノ一六
信 照	織田信照子見ヨ	梅 園	刺田梅園子見ヨ	巴 靜	大田巴靜子見ヨ	林市郎右衛門	二ノ三
信 時	織田信時子見ヨ	梅 園	正木伊織子見ヨ	長谷川敬	一ノ一六	林 海	二ノ六〇
信 長	織田信長子見ヨ	梅 岳	中川梅岳子見ヨ	長谷川夕道	二ノ三五	林喜左衛門	一ノ四二
信 治	織田信治子見ヨ	梅 間	岡田梅間子見ヨ	長谷川多仲	二ノ三	林杏介	越智廣海子見ヨ
信 秀	織田信秀子見ヨ	梅 居	野口道直子見ヨ	長谷川辰之助	三葉亭四迷子見ヨ	林 旭	一ノ五二
信 廣	織田信廣子見ヨ	梅 谷	正木梅谷子見ヨ	秦 蛾	二ノ二二	林 玄	一ノ五九
野村秋足	二ノ一六	梅 山	松野梅山子見ヨ	秦 洲	二ノ二四	林權三郎	一ノ四三
野村稻守	二ノ一六	梅 山	大橋梅山子見ヨ	秦 滄	二ノ三三	林權次郎	一ノ四三
野村玉溪	一ノ三八	萩 忠	萩 廣	幡野忠字	二ノ二七	林佐渡守	林通勝子見ヨ
野村竹外	一ノ四〇	白 翁	杉山梅園子見ヨ	八 衛	尾崎忠征子見ヨ	林七右衛門	一ノ四三
野村又三郎	一ノ四七	白 華	鏡味白華子見ヨ	蜂谷宗意	一ノ四八	林甚三郎	一ノ四三
規 綱	渡邊規綱子見ヨ	白 龍	鏡味白龍子見ヨ	羽塚秋樂	一ノ四八	林長兵衛	一ノ四三
矩 弘	近松矩弘子見ヨ	白 圭	日比野白圭子見ヨ	服部蘆仙	二ノ八七	林 桐	二ノ七〇
野呂瀨秋風	二ノ一六	伯 孝	阿部伯孝子見ヨ	服部善兵衛(直貞)	二ノ九六	林虎太郎	一ノ四三
野呂瀨曉月	二ノ一六	白 鳥	仁木白鳥子見ヨ	服部神玄	二ノ四六	林 南	二ノ四九
野呂瀨桃鳥	二ノ四三	白 圓	仁木白圓子見ヨ	服部直信	二ノ七〇	林梅山	二ノ四九
梅 逸	山本梅逸子見ヨ	白 梵庵馬州	黒田甫子見ヨ	服部直房	二ノ七〇	林平右衛門	一ノ四三
		橋本修竹	一ノ四七	服部直好	二ノ九六	林通勝	一ノ四〇
				服部培園	二ノ三六	林美香	二ノ一七

林 夏 登	一ノ四八三	英 貞	山澄英貞ヲ見ヨ	平岩 松助	一ノ四四三	深 澤 萬	一ノ二六二
林和耀軒	一ノ四八七	英 重	山澄英重ヲ見ヨ	平岩 元重	一ノ二七五	深田 圓空	二ノ一九五
早野白龍	一ノ四八七	秀 孝	福田秀孝ヲ見ヨ	平岩 元高	一ノ二八一	深田 九阜	二ノ一九八
速水鼎齋	二ノ三三七	英 龍	山澄英龍ヲ見ヨ	平岩 元成	一ノ二七九	深田 厚齋	二ノ一九七
原田忠政	一ノ三三〇	秀 成	福田秀成ヲ見ヨ	平岩 元則	一ノ二八一	深田 香實	二ノ一九九
原田延行	二ノ一六六	英 信	吉川英信ヲ見ヨ	平岩 元吉	一ノ二七八	深田 愷齋	二ノ一九七
治 興	德川治興ヲ見ヨ	人見 環邑	一ノ二四六	平尾 數也	一ノ四四八	深田 精一	二ノ二〇〇
治 綱	渡邊治綱ヲ見ヨ	日比野 秋江	三ノ二六二	平澤九期(初世)	一ノ四四〇	深田 明峯	二ノ一九六
春 姬	一ノ六〇〇	日比野 白圭	一ノ四〇七	平澤九期(二世)	一ノ四四三	福井 永甫	一ノ四四九
治 休	德川治休ヲ見ヨ	日比野 文僊	一ノ四四六	平澤 陶齋	一ノ四四三	福井 四郎兵衛	一ノ四四九
坂 頭 軒	二ノ二八八	冰室 長翁	二ノ二八六	平出 經齋	二ノ一八九	福井 初太郎	一ノ四四〇
坂 東 秀代	一ノ四七〇	冰室 藤里	二ノ二八三	平出 順登	二ノ二九〇	福井 富純	一ノ四四〇
		冰室 謙子	二ノ二九二	平出 順夏	二ノ二九〇	福井 富潤	一ノ四四〇
		百 川 彭城百川ヲ見ヨ	二ノ二九六	平手 政秀	一ノ三三三	福井 富照	一ノ四四〇
		百 非	二ノ二九六	平野 泥江	一ノ四四四	福井 富章	一ノ四四〇
東方 黃陽	一ノ四六一	平岩 加藏	一ノ四三三	平野 廣臣	二ノ一五三	福井 富有	一ノ四四〇
東方 令達	一ノ三七八	平岩 加兵衛	一ノ四三三	平野 龍門	二ノ四四四	福澤 先右衛門	二ノ四四五
磯口好古	一ノ三三四	平岩 儀三郎	一ノ四三三	高 彦 加藤高彦ヲ見ヨ	二ノ四四七	福島 鶴清	二ノ三二二
彦坂重耳	一ノ三三三	平岩 元珍	一ノ四三三	關 山	二ノ四四七	福田 季稔	一ノ二二二
彦坂忠重	一ノ三三二	平岩 太七	一ノ四三三			福田 秀一	一ノ二二二
彦坂政時	一ノ三三〇	平岩 大西郎	一ノ四三三			福田 助左衛門	二ノ四四七
眉 山 澤田眉山ヲ見ヨ	一ノ三三〇	平岩 親吉	一ノ四三三	風 岡	大鏡萬ヲ見ヨ	福田 守正	二ノ二二六

福富三郎右衛門	二ノ三三三	布 敏	浦野布敏ヲ見ヨ	北 海	津田 應圭ヲ見ヨ	堀 楚 洲	二ノ二四二
福富新齋	二ノ三〇六	二葉亭四述	二ノ四三三	墨 海	伊藤 墨海ヲ見ヨ	本 田 山 雪	一ノ三三九
芹 山 伊藤芹山ヲ見ヨ		不 轉 鶴頭庵不轉ヲ見ヨ		墨 湖	山川 墨湖ヲ見ヨ	本 多 井 南	二ノ三三一
鬼 山 水野鬼山ヲ見ヨ		古 田 敏齋	二ノ三二四	牧 山	佐藤 牧山ヲ見ヨ	本 田 親 信	一ノ三三六
藤井 雲	二ノ三三七	文 圃 岡田啓ヲ見ヨ		朴 山 增田朴山ヲ見ヨ	二ノ三三〇	本 多 俊 民	二ノ二六九
藤井 澹水	二ノ三三八	文 僊 日比野文僊ヲ見ヨ		墨 僊 牧墨僊ヲ見ヨ			
藤田清三郎	一ノ四四五			星 堂 河村星堂ヲ見ヨ	二ノ三三八		
藤田清藏	一ノ四四六			星野助左衛門	二ノ三三八	前 田 武 崇	二ノ四四四
藤田清兵衛	一ノ四四五			細井 平洲	二ノ三三八	曲 淵 仁 左 衛 門	二ノ四八一
藤田宋休	一ノ四四五			細野 一雲	二ノ三二四	牧 長 勝	一ノ三三九
藤田民部少輔	藤田安重ヲ見ヨ			細野 次雲	二ノ三二四	牧 長 清	一ノ三三六
藤田安重	一ノ二九七			細野 要齋	二ノ三二九	牧野孫右衛門	二ノ四四四
藤田六郎兵衛	一ノ四四六			細野 栗齋	二ノ三三〇	牧 墨 僊	一ノ三三九
藤 瀨 萬 徳	二ノ三三二			細野 廣齋	二ノ四四四	麻 谷 伊豆原麻谷ヲ見ヨ	
藤 瀨 萬 得	二ノ三三三			堀田 恒山	二ノ三三六	孫 彦 大屋孫彦ヲ見ヨ	
不二齋高根	二ノ四四四			堀田 梅齋	二ノ三二四	正 章 石河正章ヲ見ヨ	
藤村如童	一ノ四四六			蒲 堂 青木蒲堂ヲ見ヨ	二ノ一〇三	正 隆 渡邊正隆ヲ見ヨ	
藤 蘭 宇	二ノ四七〇			堀 尾 春 芳	二ノ一〇三	正 木 伊 橋	一ノ四四六
藤原季範	一ノ四			堀 杏 庵	二ノ一九一	正 木 惣 三 郎	一ノ四四三
藤原親昌	一ノ二五五			堀 道 隆	二ノ一九四	正 木 梅 谷	二ノ三三八
藤原昌能	一ノ二五五			堀 忘 齋	二ノ一九四	正 住 成淵正住ヲ見ヨ	
不 成 石川不成ヲ見ヨ							

正親	成瀬正親子見	松井惟貞	二ノ二五	松村重次郎	一ノ四四二
正肥	成瀬正肥子見	松井壽安	二ノ四七一	松村重藏	一ノ四四一
正虎	成瀬正虎子見	松井忠一	一ノ二八	眞野時綱	二ノ二八二
允中	首藤允中子見	松浦羽洲	二ノ四八七	眞野時綱	二ノ二八二
正壽	成瀬正壽子見	松岡仲真	二ノ二〇二	間宮正萬	一ノ二〇九
正成	成瀬正成子見	松下子東	二ノ三九二	間宮正萬	一ノ二〇九
眞實	鈴木眞實子見	松下信藏	一ノ四四五	間宮六郎	二ノ四四九
正信	竹腰正信子見	松下忠左衛門	一ノ四四五	丸淵仲山	二ノ四四九
正典	成瀬正典子見	松平雀山	二ノ三六		
政秀	平手政秀子見	松平義敏	一ノ八九		
正大	成瀬正大子見	松平義裕	一ノ八六		
正光	石川正光子見	松平義昌	一ノ八五		
正盈	間島正盈子見	松平義燾	一ノ八〇		
正幸	成瀬正幸子見	松平義行	一ノ八六		
昌能	藤原昌能子見	松平義和	一ノ八七		
間島基齋	二ノ三三二	松平義和	一ノ八七		
間島正盈	二ノ二五二	松田棟園	二ノ二九		
増田紫陽	二ノ三三六	松永國華	二ノ二九		
増田東庵	二ノ三三九	松野梅山	一ノ三七		
増田朴山	一ノ四七四	松原與一兵衛	二ノ三〇		
眞清	石川眞清子見	松村岩次郎	一ノ四四三		
松井雨白	二ノ五三三	松村七郎兵衛	一ノ四四二		

水野復齋	二ノ五九	宮川子勤	二ノ二七〇	武藤巴雀	二ノ三二	水見	五條坊水見子見	二ノ四〇
水野鳥山	二ノ五九	宮城甚兵衛	一ノ四四三	宗勝	德川宗勝子見	水居居松兄	二ノ四〇	
水野柳桂	一ノ四七一	宮城六三郎	一ノ四四三	宗睦	德川宗睦子見	茂徳	德川茂徳子見	二ノ四〇
通時	林通時子見	宮城六之助	一ノ四四三	宗春	德川宗春子見	茂徳	德川茂徳子見	二ノ四〇
行虎	加藤行虎子見	宮城六兵衛	一ノ四四三	宗秀	志水宗秀子見	茂徳	德川茂徳子見	二ノ四〇
通温	松平通温子見	三宅長齋	二ノ四四二	村井泰翁	二ノ四四七	本居内遠	二ノ四四七	
道寛	田中道寛子見	宮崎筠圃	二ノ三三	村上兵衛	二ノ三六	森槐	二ノ三三	
三井藤純	二ノ三六六	宮崎古厓	二ノ三三	村上松隆	清水忠美子見	森川南堂	二ノ三三	
光忠	石川光忠子見	宮崎睡鴨(重歌)	二ノ三三	村木虎有	二ノ三三	森川頼次	二ノ一八八	
光友	德川光友子見	宮澤欽齋	二ノ三九	村木有阿	二ノ三三	森崎是空	二ノ一四四	
光富	石河光富子見	宮田顯命	一ノ二	村瀬太乙	二ノ三七	森春	二ノ一四四	
美南川道第	二ノ一五三	宮田顯慶	二ノ三六	村瀬帶梅	二ノ四〇三	森高	二ノ一四五	
源頼朝	一ノ四	三輪可墨	一ノ四四〇	村瀬大阜	二ノ四〇二	森田悟由	二ノ六〇七	
三村幾太郎	一ノ三三	三輪月底	二ノ四四六	村瀬竹翁	一ノ四四七	盛忠	澤田盛忠子見	二ノ六〇七
三村勝五郎	一ノ四四七	三輪經年	二ノ一八	村瀬豆洲	二ノ五九	守綱	渡邊守綱子見	二ノ六〇七
三村簡齋	二ノ三三	紙谷	甲斐紙谷子見	村瀬美香	一ノ四四三	守恒	味岡守恒子見	二ノ六〇八
三村玄澄	二ノ五〇七	△		村瀬立齋	二ノ四〇八	森村爲助	二ノ一八〇	
三村子全	二ノ二九三	▽		村松彦七	二ノ一八	森村爲助	二ノ一八〇	
三村七兵衛	一ノ四四七					森木沙陽	二ノ四〇九	
三村森軒	二ノ四七〇					森嘉基	二ノ一四六	
三村惣八	一ノ四四七							
宮崎園	宮崎園子見							
武藤加六	二ノ五三五							

ヤ

柳生新左衛門(清殿) 二ノ二七  
 柳生殿包 浦速也子見ヨ  
 柳生殿廣 二ノ四四  
 柳生兵庫助(利殿) 二ノ二五  
 柳生茂左衛門(利方) 二ノ二六  
 八木秀太郎 二ノ四三  
 野水 岡田野水子見ヨ  
 安田金三郎 一ノ四四  
 安田傳六 一ノ四四  
 安田又次郎 一ノ四四  
 安田綱 渡邊綱子見ヨ  
 康永 松平康永子見ヨ  
 矢田作十郎 二ノ六〇  
 柳河春三 二ノ六〇  
 柳澤維賢 一ノ五八  
 柳田良平 二ノ五〇  
 築瀧寒松 二ノ二〇  
 矢部典則 二ノ一八  
 山岡基安 二ノ四七  
 山川墨湖 一ノ五七

山口耕軒 二ノ二七  
 山崎玄庵 二ノ四九  
 山崎菜菔 二ノ四〇  
 山崎眞人 二ノ四八  
 山下氏時 一ノ三三  
 山下氏政 一ノ三九  
 山澄龍膳 一ノ四八  
 山澄龍豊 一ノ二六  
 山澄英眞 一ノ二五  
 山澄英重 一ノ三三  
 山澄英龍 一ノ三三  
 山田阿林 一ノ四八  
 山田安亭 一ノ五〇  
 山田均亭 一ノ四九  
 山高澤右衛門 二ノ六八  
 山田丸鐵 二ノ三三  
 山田宮常 一ノ五八  
 山田佐次兵衛 一ノ四八  
 山田佐兵衛 一ノ四八  
 山田千晴 二ノ一八  
 山田眞石 二ノ四七  
 山田牛之丞 一ノ四八

山田彦内 二ノ六二  
 山田環山 二ノ六六  
 山中寛紀 二ノ五〇  
 山名彦右衛門 二ノ七〇  
 山内眞次 一ノ三三  
 山内眞秀 一ノ三九  
 山内知眞 一ノ四二  
 山邊雪居 一ノ三七  
 山村眞由 一ノ三八  
 山村眞勝 一ノ三八  
 山本荷兮 二ノ五六  
 山本自敬軒 一ノ四九  
 山本道傳(政教) 一ノ四八  
 山本梅逸 一ノ三五  
 山本正晴 二ノ一八  
 山脇和泉 山脇元知元貞元業子見ヨ  
 山脇得平 一ノ四七  
 山脇元賀 一ノ四七  
 山脇元清 一ノ四三  
 山脇元眞 一ノ四四  
 山脇元喬 一ノ四四  
 山脇元知 一ノ四四

山脇元業 一ノ四九  
 山脇元宜 一ノ四三  
 也 横井也有子見ヨ

有阿 村木有阿子見ヨ  
 雄淵 松岡仲眞子見ヨ  
 幽花窓 藤井眞雲子見ヨ  
 又齋 中村又齋子見ヨ  
 又參 中村又參子見ヨ  
 融傳 二ノ四〇  
 幽蘭 一色幽蘭子見ヨ  
 之成 成瀬之成子見ヨ  
 雪丸 豐年雪丸子見ヨ  
 弓揚右衛門 二ノ二〇

要齋 細野要齋子見ヨ  
 養齋 蟹養齋子見ヨ  
 養山 清野養山子見ヨ

養壽 神谷養壽子見ヨ  
 鳴城 青山鳴城子見ヨ  
 横井瀛洲 二ノ二七  
 横井金谷 一ノ六三  
 横井千秋 二ノ二〇  
 横井時文 二ノ三三  
 横井時冬 二ノ一八  
 横井時庸 二ノ二六  
 横井信之 二ノ三九  
 横井久時 二ノ三二  
 横井也有 二ノ六四  
 横川九右衛門 一ノ四二  
 横川助九郎 一ノ四二  
 横川文治 一ノ四二  
 横地勘兵衛 二ノ二六  
 横地三丘 一ノ三九  
 横地清溪 一ノ三九  
 義淳 松平義淳子見ヨ  
 吉雄南阜 二ノ五六  
 美香 林美香子見ヨ  
 義方 松平義方子見ヨ  
 度勝 徳川度勝子見ヨ

吉川一溪 一ノ六六  
 吉川君溪 一ノ六六  
 吉川新之丞 一ノ四七  
 吉川季廣 二ノ六四  
 吉川太七 一ノ四六  
 吉川知信 一ノ三六  
 吉川仁兵衛 一ノ三七  
 吉川英信 一ノ三六  
 吉川弘忠 一ノ四七  
 吉川弘民 一ノ四七  
 吉川弘道 一ノ四三  
 吉川弘道 一ノ四三  
 吉川正信 一ノ四七  
 吉川養太夫 一ノ四七

義建 松平義建子見ヨ  
 吉田文淵 二ノ三九  
 吉田藤園 一ノ四八  
 吉田謙在 一ノ三三  
 義比 松平義比子見ヨ  
 慶誠 徳川慶誠子見ヨ  
 義敏 松平義敏子見ヨ  
 義寅 立松義寅子見ヨ  
 義直 徳川義直子見ヨ  
 義成 愛知義成子見ヨ  
 義宜 徳川義宜子見ヨ  
 義裕 松平義裕子見ヨ  
 義端 松平義端子見ヨ  
 義昌 松平義昌子見ヨ  
 吉見幸混 二ノ四九  
 吉見幸和 二ノ六〇  
 吉通 徳川吉通子見ヨ  
 吉村爲隆 一ノ四九

義柄 松平義柄子見ヨ  
 義行 松平義行子見ヨ  
 眞由 山村眞由子見ヨ  
 義和 松平義和子見ヨ

吉原黄山 二ノ四〇  
 吉原醉雨 二ノ四七  
 寄田九峰 一ノ六一  
 頼朝 源頼朝子見ヨ

来山 果見来山子見ヨ  
 蘭阜 木下蘭阜子見ヨ  
 蘭泉 杉本蘭泉子見ヨ  
 羅城 圓珠庵羅城子見ヨ  
 藍川 南宮龍漱子見ヨ  
 轟窓 石橋轟窓子見ヨ  
 蘭宇 藤蘭宇子見ヨ  
 蘭兮 伊藤蘭兮子見ヨ

龍吟 松平君山子見ヨ  
 柳桂 水野柳桂子見ヨ  
 龍淋 南宮龍淋子見ヨ  
 柳城 横井時冬子見ヨ

龍田 中野龍田子見ヨ  
 藤屋 鈴木辰子見ヨ  
 藤屋 河村秀根子見ヨ  
 笠亭仙果 二ノ四三  
 龍涯 松井龍涯子見ヨ  
 柳喬 佐分柳喬子見ヨ  
 柳昌 朝岡柳昌子見ヨ  
 亮阿 洞松實戒子見ヨ  
 椋園 山田千晴子見ヨ  
 椋園 吉田藝園子見ヨ  
 椋院覺了 二ノ六五  
 亮齋 須賀亮齋子見ヨ  
 梁山 山田均亭子見ヨ  
 兩村 伊藤兩村子見ヨ  
 梁南 二ノ五五  
 梁南 二ノ五九  
 霧翁 二ノ六一

蓮純 三井蓮純子見ヨ  
 靈端 二ノ五四  
 連也 浦連也子見ヨ  
 靈曜 二ノ五〇  
 魯庵 石川魯庵子見ヨ  
 魯泉 司馬老泉子見ヨ  
 老足 國枝松字子見ヨ  
 老織 小島老織子見ヨ  
 六合庵 津田正美子見ヨ  
 六在 吉田藤在子見ヨ  
 六林 堀田恒山子見ヨ  
 魯山 並河魯山子見ヨ  
 露川 澤露川子見ヨ  
 若井成章 一ノ九五  
 若林素文 一ノ四九  
 鷺津宜光 一ノ二〇

鷺見春岳 一ノ四七  
 鷺見東柯 二ノ二六  
 綾竹鳩庵 一ノ三六  
 和田清齋 二ノ五三  
 和邊在綱 一ノ四七  
 波邊芸里 二ノ四八  
 波邊清 一ノ三〇  
 波邊重綱 一ノ二三  
 波邊松園 二ノ三一  
 波邊岱青 二ノ五三  
 波邊綱光 一ノ四一  
 波邊直慶 二ノ二二  
 波邊宣綱 一ノ三〇  
 波邊規綱 一ノ四三  
 波邊夢軒 二ノ二六  
 波邊治綱 一ノ三四  
 波邊方壺 二ノ二九  
 波邊正陔 一ノ二八  
 波邊守綱 一ノ一〇  
 波邊寧綱 一ノ一四  
 波邊之道 二ノ三一  
 倫殿秋慶 二ノ二〇

和權軒 林和權軒子見ヨ

昭和九年五月二十五日印刷  
 昭和九年五月二十八日發行

人物編(第一、第二)  
 定價金六圓五拾錢

編纂者 名古屋市役所

發行者 名古屋市西區下長者町四丁目九番地 川瀨 條吉

印刷者 名古屋市南區西古渡町柳田六〇番地 箕浦 甚五郎



發行所 會社 川瀨書店

348  
300

終